帝國文庫
拾壹編
明治文學史 全
大和田建樹著
東京 博文館藏版

明治文學史　全

東京博文

本間文庫
文庫1
0 59

花束

庫
14

加藤藏書

明治文學史 全

田建樹著

東京 博文館藏版

明治文學史 全

大和田建樹著

東京 博文館藏版

藏書 明治藏

文庫14
D59

明治文學史目次

(一) 総論……一
(二) 第一期……謂はゆる輸入時代
其一 福澤學風……一〇
其二 敬宇先生……二四
其三 翻譯書の流行……二八
其四 英語學……三三
其五 新聞の創業……三八
其六 雜誌の刊行……七一
其七 守舊學派……七三
其八 結論……七八
(三) 第二期……謂はゆる反動時代

其一　總論……八〇
其二　小說界の繁昌……八七
其三　戲曲脚本……一七三
其四　新体詩唱歌……一八四
其五　雜誌及著書……一九二
其六　結論……一九九
（四）第三期……謂はゆる新聞時代
概論……二〇一

明治文學史目次終

明治文學史

大和田建樹　著

（一）總論

世には天正小判の直打を知れどもドルの相場を知らざるものあり。牙山平壤の戰況にも疎きものが却て漢楚軍談を諳んじて居るたぐひの多きこそ奇態なれ。是れ他なし古を重んじて今を輕んずる的の敎育法が餘弊を今日に遺したるにて。かの新聞雜誌を後にして和文漢文の古書を先にするが如き。手紙一本書き得ぬ兒童に徒然草土佐日記の講釋を始むるが如き。我文學界に於ても往々見るところ。豈之を普通敎育の宜しきを得たるものとして。國民文學の粹に叶ひたるものとして稱譽するを得べけ

明治の文學とは何ぞ

んや。余は唯骨董家の古佛像に於けるが如きものと一般に看過せんと欲するなり。

然らば明治の文學とは何をか謂ふ。右の徒然草土佐日記伊勢物語源氏物語の再興を謂ふにも非ず。國學漢學詩歌連俳の流行を意味するにも非ず。謂はゆる明治社會の進歩と共に活動して止まざる新文學の存するものあるを謂ふなり。余は今此新文學の發達消長を探つて見んとす。亦おもしろからぬ事にもあらざるべし。

國事と文學との關係

およそ國の東西を問はず時の古今を論せず。國事の繁簡と文學の消長とは其關係を密にし。文學の運命常に社會の盛衰に伴なはれて進退するは疑ふべからざる事實なり。されば文學の盛なるは。必ず國事多端の時に在らずして其大なる出來事の後に於てするを常とす。試に見よ羅馬の文學は戰爭時代に興らをして

泰平の後に盛なりしに非ずや。又英國史中に文學の最盛時と稱せらるゝエリザベス時代は。毫も政事上に見るべき出來事なくして。山と山とに挾まれたる谷間の如く。國事多端の日を過去と未來にながめわたしたる時なりしならずや。今日の英國かならずしも世界を轟かさず。然れども政事商業を以て天下に雄飛するは。亦文學と國事との隆盛を並行せしめずして。寧ろ反對の關係に於てあるを見るべきなり。

維新と西南戰爭

我國近世の出來事として其外形に顯はれたるものゝ最大なるは維新と西南戰爭なるべし。(日清事件は暫く措く)然れども更に

三時代

社會進化を主眼にして考ふれば維新後三時代の變遷あることを知る。即ち明治維新以來の西洋文明輸入時代。西南戰爭以來の輸入文明反動時代。二十三四年後の立憲政治發達時代。これなり。

西洋學の影響

之に伴なつて西洋學の消長は我國の文學に影響すること頗る

英學の隆盛

大なるが中にも。英學は殊に民間より發達して其基礎を我國一般の社會に取りしが故に。其消長の相關するところ最も多し。明治二三年の頃より之を學ぶもの漸く增加し來り。十四五年に至つて著るしく隆盛を極めしが。十九年に森文部大臣の小學校に英語科を必ず置くべきことを令せしより。獨り外形上のみならず恐らくは精神上にも英國風を取るの傾を爲し。謂はゆる實用英學なるもの盛に行はれ。從つて諸學校に用ひらるゝ教科書も大に其程度を進めたり。其以前には例へばマコーレーのヘースチングスかクライヴ。若くはジョンソンのラセラスの類を讀み得れば一廉の英學者として尊敬せられしものが。此頃よりはシェークスピーヤ。ミルトン。スペンサーを繙き。ドラマを『雲耶山耶』に代へて口ずさむに至れり。此に於て反動時代に息ふきかへしゝ漢學が。再び若葉の霜に遇ひたる如く。萎靡して振はざる有樣と爲

小說起る

りたるは。讀者の記憶にも猶殘り居る事ならん。英學の影響は啻これらの發生と壓倒とのみに止まらずして。進むところは向ふに敵なく。殊に歷史に哲學に小說に於て其版圖を擴め。骨を英にして衣を和にするが如きもの。著述に新聞に續々現出するを見るゝ至れるは實に盛なりといふべし。而して其最たるものは小說なりき。

此に於て謂はゆる硯友社一派の新体小說家起る。其連中は柴ねは皆英學を修め。英國小說家を氣取る人々なりしかば。此硯友社の起れるは實に我國の小說界。むしろ文學界に著るしき影響を與へたるものと謂はざるべからず。何となれば其結果は種々の點に於て顯はれたればなり。其最も著るしきは小說の性質上英國風の精神を傳播したる事にして。之に反對せしむるが爲めに在來の日本風小說家を呼び起したるの結果を生じ。從つて數多の

小說結社の如きものを世上に組織せしむるに至り。小說界すこぶる賑はしく景氣づきたるは二十一二年の事なりき。曰く寫實的。曰く勸懲的。曰く悲哀的。曰く滑稽的。曰く家庭的。曰く何。曰く何と種々樣々の名稱を附して。おの〳〵其派の模範小說を出だしたるも此時代に在りしなり。余は斷じて曰はんとす。維新後の文學が小說の形に於て最も世人の眼を惹きたるは實に此時を以て頂上とすと。

憲法發布以來

憲法一たび發布せられてより。政界やゝ繁榮を加へ。殊に第一議會開會後は大小の政事問題堆積して山の如く。殊に在野政黨の政權競爭はげしきを以て。文學界は前に述べたる原則に從ひ。小說といひ詩文といひ一般社會の注目を稍や怠らしむる事と爲り。否。むしろ社會の耳目外に置かるゝに至れり。是より先硯友社既に解け。假名の會。羅馬字會。言文一致會を始として國語國文に

小說の衰運

關する研究會の如き。一時世人の耳目を聳動したりし結社會合も十中の七八まで解散して。文學界は俄に秋風落日の觀を呈し來る。讀者諸君は果して如何なる感をか爲す。

れよそ社會の有樣を觀。現在の狀態を最も能く明かに告ぐるものは新聞紙に如くは無し。されば新聞紙上に於て文學が如何に待遇せられしかを見る時ハ。余が上に述べたる判斷の甚しく不當ならざるを知らん。始め硯友社以下小說家の著るしく世上に歡迎せられし頃に在つては。巨額の俸酬と慇懃ある請願とを以て新聞社は僅に謂はゆる大家の寄稿を得たりしが。漸く新聞紙の讀者が其議會傍聽筆記に重きを置くに至り。爲めに『日本』の賣高を著るしく增したりし時代には。二三の小說家は都下に雇主を見出だす能はずして。地方新聞社に出稼するに至りしが如き。以て明かに文運の下り坂に向へるを證するに足るべし。蓋し文

當時社會の眞相

學は社會を飾るものなり。殊に小說は人民の裝飾品むしろ贅澤品の一なり。人民衣食に忙はしく未だ恒產あらざる社會に於ては。之を賓客として待遇する能はざるが故に。彼また燦爛たる光を放つ能はざるは怪しむに足らず。顧みて我當時の社會が如何なる位置に在るかを觀る時は。小說以下文學上生產の甚だ整はざること自然の勢なる事を發見すべし。實に當時の社會い創造の社會あり。また恒產貯蓄なきの社會なり。而して小說家文學家として立つところの人も。亦多くは糊口のために小說を稿し。生活のために筆を執るものなり。如何なる餘裕を以てか大作名著に從事するを得ん。かゝる生存競爭の最も盛んなる今日にありて。文學上の大產物あらんことを希望するは。寧ろ無理と謂はざるを得ざるなり。

然れども是は社會一般の原則のみ。文學界普通の常理のみ。英雄

文界英雄の出でざるは何ぞ

は常理に拘はらずして寧ろ反つて時勢を作ると聞く。文學界の英雄豈獨り之なからんや。沙翁一たび出でゝ英國は文學の名を五洲に擧げ。馬琴の書傳いりて日本の文學また歐米各國を凌駕せんとす。今此文學の微弱なる時に當つて馬琴沙翁の如き英雄の出でんことい。吾人の希望して止まざる處なるに。未だ今日までも希望の一部分をだに滿たす能はざるの感あるは何故ぞや。是れ畢竟我國の事物すべて創造の代にありて。西洋文明の摸擬に忙いしく。未だ謂はゆるオリジナリチーの精神發達せざるに主として原因せずんばあらず。聞く歐米諸國に於ては文學の社會より優待せらるゝことと著るしく。殊に其著作の秀逸なるものは上流交際社會にもてはやさるゝこと甚しと。我國の今日に在つては未だ此くの如き事あるを見ず。ひとり小說のみ稍や一般人民の耳目に觸れつゝ寵辱を異にすといへども。其消長變遷は

前に述ぶるが如く。特に是はといふ發達を認めざるこそ遺憾なれ。嗚呼小說の沿革は實に文學一般の消長と關係すること密にして且つ大なり。況んや明治社會の新產物として他に認め得べきの著作甚だ寥々たるをや。今此書中に於て殊に重みを小說よ置くものは是等の理由に因るのみ。

(二)第一期……謂はゆる輸入時代

其一　福澤學風

英國主義と獨國主義と

我國維新後の社會に最も著るしき影響を與へたるものは。讀者も知らん英獨風の二主義なるを。而して英國主義すなはち英國風の學問は民間より弘まれること。既に總論に於て余は之を言へり。すべて民間より起れるものは其下底廣く且つ堅きが故に。從つて發達また普く且つ速なるは理の見易きところ。之に反して獨乙主義は政府より先づ行はれしかば。(たとへば貴顯高官の人々が獨墺諸國を漫遊して。其碩學鴻儒の談話を聞き。又其制度文物の完備せるを見。歸朝の後これを行政財政文學軍事および其他に應用せしの類是なり)其區域の狹くして行はるゝところ從つて普からざりしは。實際に就いて之を確むるを得べし。されば彼の民間よりせしものこそ世人を感化せしむるの速力最も强大にして。我社會の方針を左右する原動力の一と爲りしは爭ふべからざるの事實なりとす。而して此くの如く。英學をして著るしき勢力を社會上に有せしむるに至りし其原動者は實に『三田の親玉』と呼ばれし

英學の勢力

福澤氏

福澤諭吉

氏なりと謂いざるを得ず。氏の來歷と性行とに就きてゝ別に言はず。其謂はゆる西洋主義を最も早く我維新後の社會に輸入し

たる事は何人も認むるところなるべし。およそ社會の革命は其後の社會をして全く綱紀を弛めしむるが故に。諸般制度の破るゝと共に。謂はゆる社會制裁なるものは悉く地を拂つて去り。新奇なるものとしいへば人爭うて之を取り入れんとするを常とす。福澤氏の西洋世義に輸入し始めしは實に此くの如き時代なりしなり。王政維新を以て我國固有の風俗習慣概ね打破せられし後に當り。西洋主義をして容易に代つて位置を取らしむるに至りしは。固より。時勢の然らしむる處とはいへ。時勢を未來に豫知して之に乘ずるの卒先者あるに非ざりせば。文明進歩の遲速いまだ知るべからざるなり。

福澤氏曰く。

世帶ノ要ハ事物ノ順序ニ注意シテ前後ヲ勘辨スルニ在リ

夕方ノ食事ヲ朝ヨリ用意シ明日入用ノ品ヲ今日ニ買ヒ冬ノ衣服ヲ秋ニ洗ヒ秋ノ暴風ヲ夏ニ防グハ固ヨリ論ヲ俟タズ都テ家内ノ品物ノ置場所ヲ定メテ其多少有無ヲ諳記セザル可ラズ衣裳ハ簞子ニ在テ夜具ハ長持ニ在ルヤ下駄ニ餘リアリテ傘ニ不足ハナキヤ蠟燭ノ安物ハ多ク買込タレ𪜈提燈ノ張替ハ忘却セザルヤ用簞子ノ底ニ不用ノ反故ハナキヤ押入ノ隅ニ風呂敷ノ潛伏スルモノハナキヤ尙甚シキハ半切ノ紙ヲ接ガズシテ手紙ヲ書キ接ギタル卷紙ヲ裂テ鼻紙ニ用ル者モアラン事物ニ順序アリト云フ可ラズ

又曰く。

學校ニ石盤ヲ用ヒテ數學ニハ明ナレ𪜈店先キノ帳合ニハ暗ク、作文諳誦ハ上手ナレ𪜈手紙ノ文句ハ出來ズ、窮理書ハ讀タレ𪜈竈ノ築キ樣ト流シノ水ハキニハ工風ヲ用ユルヲ知ラズ化學ノ吟味ハ經タレ𪜈甘酒ノ作リ樣ト豆腐ノ製法

ハ未ダ之ヲ聞カズ或ハ十二三ノ娘ノ子ガ西洋流ノ學校ニ入リ又ハ西洋人ノ手ニ附キ西洋音ノ唄ヲ習ヒ西洋風ノメリヤスヲ組ミ却テ糠袋ノ縫ヒ樣モ知ラズ或ハ和漢洋ノ書ヲ讀テ三十一字モ少シハ出來レモ人身窮理ハ忘却シテ自分ノ體ノ骨モ知ラズ風ヲ引テ容體ヲ述ルヿモ知ラズナゾ其不都合ハ今日既ニ世上ノ親達ノ覺ル所ナリ

又曰く。

世ノ論者ガ動モスレバ天理人道ト云フヿヲ唱ヘ此ハ天理ニ基ヅクト云ヒ彼ハ人道ニ戻ルト云ヒ一定不變万古動カス可ラザル者ノヤウニシテ議論ヲ立ル者多ケレモ其實ハタワイモナキヿナリ忠臣二君ニ仕ヘ甲州武士ガ德川其他ニ仕ヘテ働タルモ亦天理人道ニ戻タルニ非ズ、年若キ寡婦ガ剃髮シテ尼寺ニ入リ亡夫ノ菩提ヲ吊フモ天理人道ナリ

再緣シテ子ヲ生ンデヨク其子ヲ敎育スルモ天理人道ナリ今ノ世ニ兄弟姉妹ガ夫婦タラバ天理人道ニ戻ルナラント雖モ「アダム」「イーヴ」ノ子供ハ誰ト緣組シタルヤ又日本書紀ニ仁德天皇三十八年春正月八田ノ皇女ヲ皇后ト爲ストアリ皇女ハ天皇ノ妹ナリ今ヨリ之ヲ思ヘバ不審ナレモ其時代ニハ矢張リ天理人道ニ基キシヿナリ

往古ノ事ハ差置キ今日ニ於テモ世界各國ニ天理人道ノ殊ナルモノアリ數年ノ間ニ天理人道ノ變化シタルモノアリ支那日本ノ家族ニテ主人ノ威張ルハ支那日本ノ天理人道ナリ西洋諸國ニテ細君ノ跋扈スルハ西洋諸國ノ天理人道ナリ數年以前封建ノ時代ニ大名ノ家來ガ主君ノ爲ニ命ヲ致スモ天理人道ナリ今日ニ至リ其主君ヲ同輩ノ如クスルモ亦天理人道ナリ赤穗ノ義士ガ敵ヲ討タルハ元祿年間ノ

天理人常ナリ明治年間ニ之ヲ駁スルハ明治年間ノ天理人道ナリ火葬ノ法ハ數百年來天理人道ニ基ク事ナリシガ暫時天理人道ニ戻ルコトト爲リ又近日ハ天理人道ニ基クコニ復シタレモ數年ノ後ハ復タ天理人道ニ戻ルベキヤモ圖ル可ラズ右ノ如ク天理人道ハ古今ニ殊ナリ國々ニ殊ナリ人ノ地位ニ由テ殊ナリ數年ノ經過ニ由テ殊ナリ殆ド其在ル所ヲ求メテ之ヲ見ル可ラズ

以て其執る所の一斑を見るべし。福澤氏は實に英學主義を紹介すると共に新空氣を導き入れて舊天地を一洗し。實利的平民的を主張して打破搥下に一生面を開き。究屈迂遠なる和文漢文の臭味を嫌ひて平易通俗なる文体を起さんと力めたり。而して其論の珍奇に過ぎ極端に走りしが爲め。或は無數の反對論者を喚起し。一時は世に嫌忌せられし姿なきにしも非ざりしと雖も天

其著書

の大勢い遂に氏を助けて全勝を得せしめ。昨日の敵は今日の味方と爲りて全國一致を以て其新主義を歡迎し。其新學風を崇拜する者さへ日ま月に多きを加ふるに至れり。請ふこゝに其著書の主たるものゝ名を擧げしめよ。

學問の勸め
文字の敎
西洋事情
世界國盡
窮理圖解
童蒙敎草

其讀者をして如何に舊思想を離れて新思想に向はしめしか。如何に四書五經的の四角なる文体を脫して御座候流の平易なる語氣に趣かしめしかは右の著書に就きて知るを得ん。猶くだく

だしくとも忍んで左に抜摘せる數章を讀め。

『文字の敎の』端書に曰く。(明治六年八月)

時節ヲ待ツトテ唯手ヲ空フシテ待ツ可キニモ非ザレバ今ヨリ次第ニ漢字ヲ廢スルノ用意專一ナル可シ其用意トハ文章ヲ書クニムツカシキ漢字ヲバ成ル丈ケ用ヒザルヤウ心掛ルヿナリ。ムツカシキ字ヲサヘ用ヒザレバ漢字ノ數ハ二千カ三千ニテ澤山ナルベシ此書三冊ニ漢字ヲ用ヒタル言葉ノ數。僅ニ千ニ足ラザレモ一ト通リノ用便ニハ差支ナシ。コレニ由テ考レバ漢字ヲ交ヘ用ルトテ左マデ學者ノ骨折ニモアラス唯古ノ儒者流儀ニ倣テ妄ニ難キ字ヲ用ヒザルヤウ心掛ルヿ緊要ナルノミ。故サラニ難文ヲ好ミ其稽古ノタメトテ漢籍ノ素讀ナドヲ以テ子供ヲ窘ルハ無益ノ戲ト云テ可ナリ

又其本文に曰く。(都合不都合の文字の用例を示さんとて)

梯子ヲ荷フテ旅行スルハ不都合ナリ○婚禮ノ席ニテ泣キ吊ニ行テ笑フハ不都合ナリ○臺所ノ前ニ井戸アルハ世帶ノタメニ都合宜シ○身ノ丈高キ男ハ棚ノ物ヲ取ルニ都合宜シト雖モ人ノ衣服ヲ借リテ着ルニハ不都合ナリ○虛言モ始ハ都合宜シキニ似タレモ後ニハ必スコレニ由テ不都合ヲ生ス可シ

從來の文章は概ね漢文的ならざれば書簡体なりしに。此兩極端を折衷和合して一の新体平民的の文章を敎へたる氏の力は。實に我維新後の文學上に一大指南車と爲りたるは疑ふべからず。請ふ見よ今日の新聞に雜誌に堂々たる論文の間にさへ『不都合』『迷惑』等の文字を用ひて誰も怪しむものあらざるを。而して是等の文字は維新の初年頃まで獨り書簡文にのみ用ひられ來り

世界國盡

しものなるを知らば福澤氏が今日の文學界に遺したる功績豈著大なりと謂はざるを得んや況んや此漢字排撃説は遙に後日の『假名の會』を喚起し『假名の會』は遂に國語國文の隆盛を誘導せしものなりとすれば我輩明治の文筆に從事するもの寔に謝すべき處を知らざるなり。

『世界國盡』は萬國地理を敎へしものなるが其文に曰く

世界は廣し萬國は多しといへどおほよそ五つに分けし名目は亞細亞阿非利加歐羅巴北と南の亞米利加に境限りて五大洲大洋洲は別に又南の島の稱へなり土地の風俗人情も處かはれば品かはる其様々を知らざるは人の人たる甲斐もなし。

・・・・・・・・・・

遺恨に遺恨かさなりて賴むところは天地の理頃は安永五年の秋十三州の名代人四十八士の連判狀世界へ示す檄文に英吉利王の罪を責め自から建てし合衆國武器兵粮も乏しき民數萬の敵は海を越え新手引きかへ攻め來る猛虎飛龍の勢におそれ撓まぬ鉄石の心に誓ふ國のため失ふ命得る自由正理屈して生きんより國に報ゆる死を取らん一死決して七年の長の月日の攻め守り智勇義の名を千歳に流す血の河骨の山七十二戰の艱難も消えて忘るゝ大勝利目出度こゝに英吉利と和睦結びし新條約。

世界の地理と歷史とは平易流暢の日本文字もて書かれたり趣味ある馬琴調の七五体は新輸入の事實を記すに用ひられたり兒童豈喜んで之を口に誦し節を附けて吟せざるを得んや此書一たび出でゝより到るところの學校に往來に『世界はアひろォしばアんこォくは』と歌ふ聲を聞くに至りしなり是れ彼の殺伐

なる詩吟の口調を變じて。未來の唱歌軍歌を喚起するの伏線と爲りしものと謂はんも敢て誣言にはあらざるべし。何ぞ現今行はるゝところの『かまくウらァだんじありィ』『あぞゝいふ口調の甚しく相類似せるや。作者或は知らずといへども。『世界は廣し』『調の暗々裡に維新後の人氣を感化せし結果の多少腦裡に染み着き居るものと謂はしむることは。讀者或は余に之を許すべしと信ずるなり。

童蒙教草

童蒙教草に曰く。(英人チャンブル氏著モラル。カラッス、ブックの翻譯)

世の中にかえる。でゝむしは。いもむしなどいふ虫あり罪もなきものなるに心なき人は見付次第にこれを苦しめこれを殺すことあれども以ての外の事なり假令ひ如何なる虫にても無益にこれを痛るは宜しからず且又小さき動物をむごくするよりして追々これに慣れ我同類の人を扱ふにも慈悲の心を失ひ遂には大惡無道の働を爲すに至るべし故に人若し不圖したる出來心にて斯る虫を殺さんとすることあらば則ち我身に立返り若し我身体より數倍大ひなる怪物ありて我を苦しむること今我この虫を扱ふが如くならば其苦痛如何ばかりならんと身に引替て虫のいたさを思ひ知るべし

慶應義塾

翻譯文章の好模範を與へしのみならず。亦後日の修身書に小學讀本雜誌に新聞に苟くも兒童を教訓する的の文章に用ひらるゝ語氣は此時に誘導せられしを知るべし。是等の理由によりて如何でか我明治文學史の初に於て福澤諭吉氏を大書特筆せざる可けんや。

氏は是より先き英學校を創立し名づけて慶應義塾といふ。其執るところの主義は既に述べたる如く實利平民的なりしが故に

子弟の感化薫陶せらるゝこと特に著るしく。其塾より出でたる人々が社會に雄飛するに當つては。綱紀既に弛み日に新奇を好むの世の中には非常の歡迎を受け。政治上經濟上の意見は多く其塾出身の人々の支配する雜誌新聞著書のために左右せらるゝに至れり。文學も亦此影響を免かるゝ事能はず。世人をして『詩を作るより田を作れ』と言はしめしも此頃の事なりき。從つて文學の平易になり平民的に爲りたるは前にしば〳〵之を述べたり。猶更に文學が理屈的に爲りたりと謂はんも亦不可なかるべし。而して此理屈的に爲りゆきたる文學こそ。明治社會の理屈的に爲りゆく寫眞とも見るを得べきなれ。

東京を挾撃せし二學者

其二　敬宇先生

東京に二學者あり。曰く三田の福澤。曰く小石川の中村。小石川の中村とは同人社を建て西國立志篇を譯して有名なる

敬宇先生

これなり。東京の兩端より西洋主義を以て紀律なき當時の紛雜社會を挾撃せしが。福澤氏は其執るところ平民的なりしを以て。廣く社會に影響を與へしは遙に中村氏に勝りしならん。然れども中村氏も亦大に西洋主義を輸入して西洋道德主義を加味したる結果は明かに顯はれたり。氏は漢學の力深かりしが爲め。其

西國立志篇

の如き

西洋品行論

立志篇と品行論

の如き。實に英書翻譯の事業未だ盛ならざりし時にあたりて世人に利益を與へたる最も完全のものといふべし。請ふ一章を引かん。

瓦德幼年ノ時戯玩ノ具ヲ作ルヿニ巧ナリケリ」ソノ父ハ木工ニシテソノ舗ニ象限儀アリケルガコレニ因リテ生物體質ノ學（或ハ生命ノ理學ト譯ス）ニ心ヲ留メソノ深奥ニ達セリ又常ニ野外ニ徜徉獨歩シケルガコレヲ時トシテ草木ノ學ニ意ヲ用ヒタリ」算術ノ器ヲ作リテ家業トナシケル時大風琴ヲ建ルヿヲ或人ヨリ托セラレタリケレバコレヨリ始メテ音韻ヲ調和スルヿヲ學ビ遂ニ善クコレヲ造レリ額拉斯哥ノ學堂ニ牛國民ノ作レル蒸氣機器ノ小キ樣子ヲ藏シテアリシガ之レヲ修復スベシトテ瓦德ニ托セラレタリケレバ瓦德之レニ因リテ前人已ニ發明セル所ノ熱ノ作用及ビ蒸氣ノ漲開シ收縮スル所以ノ理ヲ講求シ又同時ニ機器建造ノ法ヲ研究シ困苦勉强久フシテ怠ラザリシガツヒニ縮密蒸氣機器ト云ヘルモノヲ造リ出セリ」瓦德此ノ機器ヲ造リ出セルマデ許多ノ星霜ヲ經タリソノ間成就スベキ望モ必シガタクマタ朋友ノ慫慂スルモノモ少カリシガ瓦德ハ更ニ工夫ヲ怠ラザリケリ」然レモソレガ中ニ家人ヲ養フタメニ象限儀ヲ造リテ之レヲ賣リ絃弓簫管及ビ其他樂器ヲ作リ汚水ノ工事ヲ測量シ道路ノ修造ヲ監視シ水道ノ築作ヲ掌理シ之レ等ノ事ヲ爲シ正經ノ利ヲ得テ生活ヲ營ミケリ」久シフシテ後一箇ノ良友馬賓葡爾敦ナルモノヲ得タリ亦タ工事ノ帥首タル俊傑ノ士ニシテ巧思アリ精力アリテ遠大ノ見識アル人ナリ」瓦德ノ縮密機器ヲ用ヒテ人力ニ代ヘ諸般ノ工事ヲ爲ンヿヲ企テ遂ニ能ク志ヲ成シタリケリ

此書の譯し方に就いては人或は非難を試むるものありといへども今日に於ける英學の程度を以てしても猶之を最も完全なりといふを得べく其中に含まるゝ西洋道德主義が其書の小學

賞與品と爲り或は英文翻譯の參考書と爲りつゝ廣く我社會に傳播せられたる事い爭ふ可からざる事實なりとす

其三　翻譯書の流行

一たび福澤中村二氏著書世に行はれ學風社會を風靡せしより。一般人民の思想は著るしく西洋風に化し。一にも二にも摸倣反譯を主として後れん事を懼れしかば。其弊は遂に『我』なる觀念を失ひ。又謂はゆるオリジナリチーの無き世の中と爲り來れり。而して京濱の鐵道。市中の電信。其他百般有形的の文明は之と伴うて一般の思想を謂はゆる開化的ならしむるに至りぬ。

其結果として現はれ來りし當時の著書は。概ね翻譯ならざれば燒直し。若くは直譯的の開化主義を紹介するものに過ぎざりき。其一二例を言い〻。歷史には。

著書の種類

萬國新史
泰西史鑑

の類。地理風俗には

輿地史略
西洋新書
西洋見聞錄

の類。修身敎訓には

勸善訓蒙
西洋英傑傳

の類。經濟には

世渡の杖
銀行論

の類。政事には

眞政大意
立憲政体畧
萬國公法
の類。科學には
道理圖解
博物新編(和譯)
天變地異
人身究理
の類。開化主義の紹介者としては
開化問答
文明開化
東京土產
の類。枚擧に暇あらざりしが。二十七年の今日を標準として言へ

ばこそ。其說くところの程度いかにも幼稚にして笑ふに堪へがたき事もあれ。當時に在りては書林店頭の上席を占め。學校教科書の重なる部分を領せしなり。

今や彼の紀綱弛みはてたる社會に劇しく此の西洋主義の注入せらるゝが爲めに。世人の思想は日に從つて平民的に自由的に權利義務的に趣き。それらの主義をして殆んど第二の天性あるが如くに至らしめたり。そもく我邦人は常に法外なる事を好み過劇なる事を喜ぶ性質なるが故に。是まで人の思ひも寄らざりし新奇の思想は。一たび侵入すると同時に。雙手を擧げて歡迎せらるゝに至る。實に佛蘭西のルーソー氏が

民約篇

は此歡迎聲中に兆民中江篤介氏の手に依つて我社會に紹介せられしなり。ルーソー氏の原書『コントラ、ソシアル』が如何に西洋

佛蘭西思想入り來る

諸國に於て爭うて讀まれ。爭うて翻譯せられしかは讀者之を知らん。佛蘭西流の思想は是よりして漸く我社會に注入せられんとす。而して當時の我社會い其是非善惡を判斷するに暇あらざりしなり。

余は又繰返して曰はん。維新後數年間の我社會は創造の時代なり。政事上繁忙極まるの時代なりと。實に當時の社會は有形無形共に一大變化を爲すの多忙なる時代なりき。又何の暇あつてか沈思默考以て文學上の推敲を爲すを得ん。見よ當時の著述中殆んど文學上の作の無かりし事は。明に其の事實を證して餘あるを。

文法書の始祖

田中義廉氏が我國語文法書の卒先者として日本文典を著はしたるも此時代ありしといへども。其說くところ悉皆西洋文法書の直譯といはんも不可なきの体裁なりしを見ても。全く翻譯時代の反映なるを知るに足らん。然れども後日純粹文學の興らんとする曙の光は此暗冥の中に含まれ居る事を忘るべからざるなり。

其四　英語學

修むる目的

此時にあたり慶應義塾の卒業生は到るところに厚く聘せられて英學校の教師と爲り。殆んど他の學風を壓倒して全國を福澤學風に化せしむるの勢なりしかば。從つて英學に志すもの日に月に增加して。梅雨後の蚊も啻ならざる有樣と爲れり。其修むるは如何なる學科ぞ。恰も幕府時代の漢學の如く是といふ專門をも定めずして。唯英吉利の文字を讀み。英吉利の書籍を解し。英吉利風の主義を注入するを以て目的とせしは疑ふべからず。謂は

もる實利的にして之を以て身を立て之を以て社會に交らんとするに出でたるは十の八九なりけらし。其讀むところは如何なる書ぞ。其初歩よりして三つ四つ言はゞ

讀むところの書

ユニオン讀本
ウルソン讀本
ビネオ文典
バーレー萬國史
グードリッチ英國史
同　米國史
ギゾー文明史
バックル文明史
ウェーランド經濟書

正則變則

の如き是なり。謂はゆる正則變則といふ言葉の起りしも此時にて。官立の外國語學校等にて規則立つたる英語の教育を受けたるものを正則と稱へ。慶應義塾の如き唯英字を知り英書を讀むに止まりて。英語を話し英文を綴るを意とせざる教授法を變則と呼ぶは今も同じ事なれど。此時の變則流の發音い實に抱腹に堪へざる事も甚しかりしなり。或人『ヂーボー』(近隣)の文字を誤りて『ヂジボー』と讀み。『ザーキセス』(人名)を『エキセルエキセス』と得意で讀みしは余が記憶せる處にて此時代の事ありき。

英學の功績

英學の程度は實に此くの如く低かりしにも拘はらず。其人心を勸誘して或い實業的に或は政事的に又稀には文學的に向いしめし功績の多きは。煌として火を見る如く誰か又之を疑ふものあらんや。實に輸入時代の思想改造に於て之が原因と爲り。又之が結果と爲りて次の時期を招き出だしたり。

今英學の事を語るにあたりて忘るべからざるものあり。當時之

辞書の困難

を修むるの困難なりしは之を修むる容易なるの今日よ於て想像も能はざる事これなり。中にも辭書の拂底なる、否寧ろ無しと言いんも不可ならざる時にあたりて英書を學ぶ事なれば。其勞其苦如何ばかりぞや。かゝる中に現いれ出でたる

英和辭彙の出板

英和辭彙

の恩惠は豈こゝに大書特筆せずして可ならんや。此書は柴田昌吉子安峻兩氏の同譯に係り。明治六年一月を以て日就社より出板せられたり。請ふ左に其緒言を引きて著譯事業の容易ならざりしを證せん。

（前畧）從來一二の英和字書世に行はると雖も惜らくは完備なる者少し故に斯學に從事する者或は靴を隔て痒を爬の憾なきこと能はず於是林道三郎柳谷謙太郎の兩學友と相謀り英國法律博士阿日耳維氏の字書を原本として庚午の春始て稿を起し公務の餘暇を偷み共に對譯を勉む然れども之を刷印するに許多の苦心をなせり會横濱の商絲屋平八此事を聞き抵當の有無を問ず首として金若干を出し以て我輩の創業を助く因て刷印の器械を外國より購し譯成るに隨て之を刷印し遂に今春に至りて成功を得たり抑此書の語數大約五万五千にして名物の圖五百有餘あり且毎語に口音を附するを以て之を從前の字書に比すれば或は便なる所あらん固より天下の事理窮なく我輩の見聞限あれば桂漏誤謬の憂なきと能はず豈此書完備讀者をして麻姑を學ぶの快愉あらしむると言んや唯英學生の爲に萬一の裨補を計るのみ加之此類の字書刷印の法に至りては本邦先是未だ開けざるもの我輩始て其法を試み此書を刷印するを得たり故に今后字書を刷印する者復外國を仰ぐと

を用ひず是亦開化の一助國益の一端にあらず乎
以て其功の辭書としてのみならず印刷業の上にも大なりしを
知るべし今や新辭彙の之より數等上位に在るもの續々出づる
に當り其創業者の恩德を將ゑ忘れんとするに憶ひ起すも亦本
に報ゆるの一ならずや。

新聞の起原

其五　新聞の創業

東西南北より報知を得るものを西洋の新聞とす我國輸入時代
に在つても四方より諸般の智識を注入し又内外の出來事を報
告するの必要既に起りしかば達觀の士は其博く得たる智識を
社會に傳へ若くは其當時の社會以上に進める自己の智識を以
て世人を指導せんが爲めに新聞紙を起したり其起原は元治元
年横濱に於て米人ウエーランドが毎月數回發兌せし

新聞紙
なるものにして實に新聞記者の卒先者とも稱すべき
岸田吟香
氏之が主筆たりしなり。
續いて同港の外國人は
萬國新聞
を發刊せしが明治維新の初年前後には東京市中にも
内外新報
中外新聞
又横濱には
藻鹽草
などいふもの出で政府にては
太政官日誌

の發行せらるゝに至る。先なるものは民間新聞の元祖にして最後のものは今日官報の開山ともいふべきなり。

新聞の記載する事柄

然れども其記載するところは趣味もなき公文と雜報とに止まりて。未だ輿論を以て自ら任ずるの社説なるものあらず。況んや放言大聲以て時事を議するをや。況んや悲憤慷慨以て政事を論ずるをや。政府いまだ是等の自由を新聞記者に與へざりしが故に。實に其紙上寥々たること今日小新聞の附錄にも及ばざる遙か數等の下にありしと謂はんも不可なからん。請ふ左の内外新報の殘篇を取つて讀め。

當時新聞の体裁

前將軍□□公滯りなく此度の事を御請ありて昨十一日早天に江戸御出立水戸表に向させられ候一体御觸面にては十日のよしなりしが故ありて延引せしと云○其御供は銃卒四五百人鎗劍隊千二百人あり○前將軍の夫人は江戸にのこり玉ひて水戸殿の御館に御引うつりなり

此程横濱に居られし大原前侍從殿昨十一日九ッ半に御入城に相なる其軍勢は薩摩肥前阿波の兵にして皆ライフル銃を持たり其行列眞先に

御門の旗を立五人にてこれを持つうの樣はなはだ珍らしく壹人は旗竿をさゝげ他の四人は竿の頂上より出たる綱を引れたをれざるやう釣合ひを取れり

さて通行のみちすじにては家々戸をとざしほそ紙札にて目ばりをなしたり通行のとき道路にありし士民はなみ平腹蹲踞(ヒザマヅク)せりしかるに西洋人は更に其國人のなすごとくせずして馬上にありて傲然とこれを見物するに誰もとがむる事をせず聊か故障ある事なし實に日本人の開けたると是にて知るべし(横濱日刊新聞を内外新報に摘錄せし一章)

○

閏四月二日(慶應四年)午後零時十五分に品川沖のかたに當りて砲聲きこゆ横濱に於て外國船祝砲をうつかと思ひて袖時儀を見るに砲發の間あるひは三秒あるは十五秒あるひは一秒又は三十秒等にして時間揃はずその音も空砲と(カラ)はちがひてあとにひゞきあり翌三日の夜十時ごろよ本所のかたに火の光り見ゆ夜半すぎて滅せず五日の夜もまた同じかたに火の光りを見る行德、市川、八幡、船橋の邊に戰爭ありし由なりされどもいまだ其確報を得ざれバこゝに其詳あることをのせず

○

寒暖計の度(メモリ)は三種あり「セルシウス」「レアウミュール」「パーレンヘイト」と云日用には多く「パーレンヘイト」を用ひ機械學家にては多く「セルシウス」を用ゆ「セルシウス」は氷點を零度とし沸湯を百度とす「レアミニュール」は氷點を零度とし沸湯を八十度とす「パーレンヘイト」は氷點を三十二度とし沸湯を二百十二度とす故に「セ」氏の六十五度は「レ」氏の五十二度「ハ」氏の百四十九度なり

○彌生の頃世の中いとさわがしかりければ

此春はよるの錦の山さくらさくかひもなく散るぞわびしき　よみ人しらず

○

中外新聞第廿四號に載せたる看客の總代括囊軒と記せし或人の一封書亦我社中に投與せり始には新聞の益盛大なるを賀し終にハ各報の重複多きを責む其言實に理ありと雖ども撰者一手に出ざるを以て亦之を如何ともする無き

の意開成社之を辨する盡せり夫れ外篇は固より中外の羽翼にして雜報亦内外の皷吹とす極めて複出を嫌ふと雖ども猶偶合あるを免れず況や頃者江湖新聞、遠近新聞、新聞事略の類輩出して既に六七種の多きに至れり安んぞ能く之を防く事を得んや然れども其甚しきに至ては我全文を奪換して之を横濱の譯稿よ托し或は英佛の寫眞と矯はり造意の圖畫を挿入する者ありと聞く其狡猾抑如何ぞや啻に新聞報告の旨趣を失ふのみにあらず是をして稗官不正の書と同じからしむ惜むべきの甚しきならずや我曹恐らくは此弊一旦止まず前後相倣ひ遂に猥褻紛擾人をして厭わしむるの日に至らば各局の衰滅立て待つべきのみ然らい則今日の盛なる誠に喜ぶべしと雖ども安んぞ明日の衰へざるを保せんや是れ我曹の深く憂とするところなり冀くは將來刻成の日互に各本を交易し有無を參照せん事を彼に詳かなるは此に省き此に載するは彼に删り務めて公正に歸し踏襲の弊なからしめば則倫敦府百六十餘局の多きも亦企てゝ而して致すべし豈開化の一盛ならずや。但其一時並刻して冥符暗合するは此例を以て規す可らざる者あり是我曹の各社幹事に望む所以にして併せて或人の厚意に答ふる所以なり

實に當時新聞の体裁は概して此くの如くなりしなり。之を誠に今日の大新聞小新聞に比べ見よ。其幼稚なる有樣は二十六七年の小新聞どころか地方新聞よも數歩を讓らざるべからざるを發見せん。然れども時としては紙末の餘白に時事を詠吟せる詩歌を添へたるが如き。無味の中にも趣味あらしめんとの工夫は凝らしつゝあるが如し。其『中外新聞第廿四號に云々』の論說の如

きは。之を今日の新聞紙上に見出すも耻かしからぬ文字にして。亦た當時新聞の實況を語るの詳なるは。特に之を摘錄して余が說くところの足らざるを補はしむる所以なり。

江湖新聞

江湖新聞の生れたるは明治元年に在りて。其半生を新聞事業に殉せしめたる

福地源一郎

氏之が產婆たりしなり。氏は『新聞紙實歷』に曰く。『(慶應二年)再び幕使に隨行して英佛二國に駐在せる凡そ十ヶ月この間敢て繁劇と云にも非ざりければ巴里倫敦の諸名家よ會して新聞紙の事を問ひ其內外の政治に關して輿論を左右するものは即ち新聞の力なりと聞きあはれ余にして若し大學文章あらば時機を得て新聞記者と爲り時事を痛快に論せんものをと思ひ初めたりき』と。氏又曰く。『竊に條野傳平廣岡幸助西田傳助の三人に謀り乃ち四月上旬を以て新に江湖新聞と名けたるを發兌刊行したり。今日の如き活字も無く活版も無かりければ之を木板に彫刻して馬連摺にしたり。而して江湖新聞は半紙二ッ切にて每號凡そ十枚乃至十二枚を一冊とし是を綴たれば取も直さず今日の雜誌の疎末なるものなり。其体裁は雜報あり寄書あり時論文ありて其草稿は盡く余が一人の筆に出て其淨書の如きも時として余自から板下を書き概ね三日若くは四日每に發兌を試みたるに諸種ありける中にも江湖新聞は尤も發兌の部數多しと稱せられて頗る世人の矚目を惹きたり』と。以て此新聞の起れる所以と及び其創業時代の萬事不便困難なりしを知るべし。而して其不便困難を極めたる孤軍城中に籠居して此新聞大業を成就し。此開明の電氣燈を揭げたるものは。もとより時勢の然らしむるところとはいへ。抑も亦福地氏の大功に歸せざるを得ざるな

日々新聞

り。然るに幾もなくして江湖新聞い發兌を禁せらるゝの不幸に遇ひしが。遂に五年二月を以て其第六千九百號の長齡を今日に見るの

東京日々新聞

は創立せられたり。而して岸田吟香氏は其筆權を握りたり。然れども猶其雜報新聞にして謂いゆる社說なるものはあらざりしなり。其雜報文体の如何なりしかは左に拔萃するを見て知るべし。

江湖叢談　豐岡縣下豐岡町籠旅屋幸七方に怪敷体の者晝寐し居しを番人頭雲八及勝次郎外二名の者兼て見込の儀有之捕縛なすべくと立向ひたるに右は强盜庄吉と云る者にて忽ち拔刀して切り掛たりしが雲八以下の者共戮力して遂に之を捕縛せり縣廳大に賞し以後の奬勵とも成るべくとて雲八及び其悴勝次郎へは金五百疋宛外二名は三百疋宛下し賜りしと也

○

新潟縣貫族新發田住
君安太夫三男
祐次郎

右の者戊辰夏中發狂の上同六月十五日父安太夫寐所へ至り脇差取去りし樣子なる故安太夫之を取上んと追來りしを右祐次郎立戻り肩先より乳の下七寸程切附其他數ヶ所疵を負はせたりしに元來安太去中風の症にて衰弱の折柄破傷風と變じ醫療不叶して同月十八日曉病死おせしに付舊新發田藩に於て入牢を命せられ今般新條例に凡瘋癲を發し實父を殺す者斬とあるにより除族の上本月七日斬罪

日々新聞紙面の擴張
福地氏日報社に入る

相成るの由

かゝる幼稚のものなりし上に紙面も西の内大の廣さにて藁紙もしくは粗造の西洋紙を以てせし片面摺なりしが七年十二月大に之を擴張し体裁を改良すると同時に福地源一郎氏は入社して社長と爲り主筆と爲り社説の一欄を設けて時事を議する事となれり。

其八年六月廿日(千四十六號)の論説に曰く。

奴隷賣買一條に付日本と白露との間に起りたる差縺れは双方の協議にて裁判を魯西亞帝に乞しに此程魯帝の審判にて我國處分に不是なしと定りたる旨の電報ありし趣は四五日前に横濱西字新聞に登錄し我か東京の各紙にも之を掲載したり此報恰も此程の樺太割與の治定に於けるが如く比々是新聞社中の私報に係る者にして固より公報に非す(公報ありしにもせよ政府より之を吾曹人民に公知せしめざる間は日本には未だ此事に付公報なしと見做ざる可らず併し外交機密に關係しては何時でも人民が鼻毛を抜かるゝ例あり御互にウッカリは出來せまぬ)況んや彼の電信私報は往々訛を傳へ實を謬る事多き者なれば容易に信ずるを得ず(然れども吾曹は疾より歐洲の電報にて此佳信を得んとを心待ちに待ち搆へたる折柄なれバ所謂意を以て實を邀る者に類似し姑らく之を信報なりと思んと欲す若不幸にして虚報ならば吾曹は世上の諸君と共に愛國の熱心を貯ふるの切なるが爲に浮々虚報に引掛り赤髯先生の戯謔に欺かれたりとするも眞逆に國家の大害を招く程には非ざる可し)此の奴隷賣買差縺の始末を熟考するに吾曹は此一件に付假令何人に裁判を乞ふとも日本人が必

す曲非に陷らざる可し陷るべき理なしと信じたり況や魯帝の裁判たるに於てをや一体白露國は南亞米利加洲の一共和國にて新作の諸業に於て今以て奴隷を使用するの國柄なれば近來往々と支那より奴隷を買入るゝ事を行ひしに支那にてもさすが内地にては中外の間に於て人身賣買を公許せざるに付き幸に澳門は蒲萄牙領たるを以て白露人は澳門を本營と定めて買入を成せしに殘酷を行ふに忍ぶの性質ある支那奸商中の尤も狡猾なる者は此奴隷買入の請負を爲し廣東近傍の賤民貧夫等を欺罔し聊の金錢を與へ甘言を以て之を誘引し澳門に來らしめて白人に引渡す白人は其の愁傷をも顧みず歎願をも聞入れず荷物の如く取扱ひて無暗と之を奴隷船に積入れて白露に輸出せしが同國の帆前船マリアルイガ號も例の通に澳門にて此奴

隷積入を致し澳門官吏の證書を携帶して出帆せしに海上にて風並よろしからず止を得すして横濱に入港したり此の奴隷に賣渡されたる支那人中に港内に於て水中に飛入りたる者あり近傍に碇泊したる英國軍艦の爲に救ひ上られ始末を糺されしに奴隷たる事明白なりしに付き直さま神奈川縣裁判所に引渡しと相成り彼の不幸なる支那人は漸やく哀訴の路を得たり裁判所は此哀訴を取上げて奴隷船の出帆を取押へ船中の支那人を殘らず呼び出して口供せしむるに果して欺かれて奴隷に賣渡されたる者共なりき船長某い一身の才辨を揮て雇奴（クーリー）の賣奴（スレーヴ）と同一ならざる理を虚構したれともよしや「クーリー」とも「スレーヴ」とも勝手に名を附けよ實地を見れば人身賣買に相違なし增して條約濟の隣國なる支那人を日本にて保護せざるの道理な

しと朝野の公論は嘖々として茲に傾むき愈々奴隷の裁判を成したるに船長某は逋債に苦しみ「マリアルイザ」船を置き去りにして逐電せり此に於て其船は賣拂となり支那人は盡く解放して本國に送り返されたり」其後白露より公使を我國に送り東京に於て追々と談判に相成り日本にては此裁判を申し渡すへき權利なしといひ白露國の法律では奴隷の禁なしといひ「クーリー」と「スレーウ」とは別なりといひ遂に若干の金を以て白露人の損害を償はんとを望みたれども中々我政府にて此を聞入れず遂に双方より書面を以て之を魯西亞帝に訴へ其の中立の裁判を乞ふ事に決したり

右に付我政府は魯京駐劄の日本公使援本武揚氏に命して答辨書を魯帝に出さしめ白露よりも種々の書面類を持出

したれども全体の事柄に於て何分とも白露の方は曲非に判せらるべき趣を先頃曾て私報にて聞込しが遂に斯くは決判と相成し事と思はるゝなり」此の慈愛ある美舉を日本に於て行ひたる以來は其勢力にて著しく支那海の奴隷賣買を減少したるに付き魯帝は必ず天理の正道に基き飽までも此慈愛の擧を勸奬して澤を東洋一般に蒙らしめん事を希望せらるべしと信ずる也吾曹ハ將に他日の公報を待て之を徵せんと欲す」日本人民の仁慈を貴重するや已に內國の奴隷賣買を禁じ年季解放又外人の爲に奴隷に陷るを救ひたるの進歩にて明白なり然り而して其人民氣力の進歩に於てハ依然尙論者の爲に奴隷根性の批評を蒙りながら未だよく憤起して之を排除し能ハざる者は何ぞや嗚呼內部の進歩は外部の進歩と並馳し得ざるもの滔々皆然り

豈啻に奴隷のみならんや

之を一讀せば當時の論文体は如何なりしか。當時の所説思想い如何なりしか。以て知らるゝなり。

諸新聞起る

此頃に當り日刊新聞は續々東京に現はれ。當時の名士文人はお〳〵一方に陣を搆へて。或は漸進主義を執り或は自由民權を説き。筆鋒を鋭うして文壇場裡に對峙の開戰を爲せり。曰く

東京日々新聞

の

福地源一郎

岸田吟香

末松謙澄

諸氏。曰く

報知新聞

の

栗本鋤雲

矢野文雄

藤田茂吉

諸氏。曰く

朝野新聞

の

成島柳北

末廣重恭

二氏。曰く

曙新聞

の

岡本武雄

氏曰く

横濱毎日新聞

の

沼間守一

氏以上之を五大新聞と稱へて當時の大新聞とせり。此外前には英人ブラックと云ふ人の發刊せし

日新眞事誌

あり。後には

鈴木田正雄

氏を以て其名を轟かしたる

讀賣新聞

出でゝ傍假名新聞の濫觴を爲し。遂ゑ小新聞の巨臂と呼ばるゝに至れり。

五大新聞

今立ちかへりて五大新聞が如何なる形容詞の下ゑ記憶せらるゝかといふに『日々』は太平記風の文章を以て其名高く『朝野』は文學的に傾き諧謔諷刺の雜錄あるが故に世間喜んで之を讀めり。『報知』は寧ろ翻譯的と漢文的との兩端を以て成り『毎日』は實着『曙』は過激との評ありしは當時の新聞讀者たりし人々は誰も熟知する處ならん。是等如何なる文體が當時の讀者を喜ばしめしかは更に左の二新聞の拔萃に就いて見よ。

『報知』の論說に曰く。(八年六月廿二日)

邦人の事物を辨別するに精ならざるよりして甚だしき間違を引起すと多し就中其最も我輩をして今日に箝口默々する能はざらしむるもの丶一例を擧げば曰耶蘇敎と洋學なり世人此二の者を以て異名同物なりと誤認し洋學を修むるものを呼で耶蘇の敎徒となし其說を聞けゞ大抵自己

先入の說と相異なる所あるを以て之を癖說邪道と稱し甚しきに至りてゝ其說を主張するものを呼で狂人となすものありそれも無學文盲の頑民なれば何も咎るには足らざれども苟くも事理を考ふる先生達が此區別を誤り最初より理窟も何も棚に上げてうれは耶蘇なり邪說なり又以て聞くに足らずと云て少しも相手にならず之が爲我輩の拒絕せられて思想を聞かざること既に幾度なるを知らず噫是吾輩が耶蘇敎と洋學との區別を說き明すに汲々として箝口默々する能はざる由緣也

我輩は先づ此區別を說き明す前に宗敎の何物たる學術の何物たるの大意を手簡に論せんと欲す　宗敎は神を敬し神を恐れ神を愛し神を拜し神の命戒には理非曲道をも問はずして默從すべし即ち英語にてバッシーブ、オベジエンスと云ふことを敎るものなり此意を推し擴めて考ふる時は詰り宗敎なるものは甚だしく人間を見下げ果て人間の力は弱きものなれば是非とも神樣に御賴み申さねばならぬ故神を愛し神を恐れて神に事べしと敎ゆるなり然れども學術は之に異なり人智を研き人力を强め人間をして神力に打勝ち神力を支配せしめんとするものなり」此の說き明しに依て我輩は宗敎と學術と相反對したる點を見出すなり曰く宗敎は神力を强くし人力を弱くするなり然るに學術ハ神力を弱くし人力を强くするものなり我輩が宗敎を格別珍重がらぬはこゝ等の故を以てなり」前に「バッシーブ、ヲベジュンス」といひしが此言葉は耶蘇敎の最も主とする所にして我輩の考にてハ此言葉が殊更に人智の發達を妨ぐるものなりと思はるゝなりすべて智力の發達するは事物

に疑を容れて精しく理窟を研究するより起るものなりそれに今自己の腦力をば使はずして神さんの云ふ通りのとをバ何でも本とふの事にして間違なきとと承知せよと敎ゆるは智力の發達を止めずして何としやうか我輩の常に智力を研き腦力を强めんと欲するに當り宗敎に依賴する能はざるも此他に道理なし」我輩の所謂洋學なるものは智力を發達せしめ神力を殺ぎ人力の領分を廣めて神力の領分狹くせんと欲するものなれば正に耶蘇敎の主意と相反するものなり斯く發揮としたる區別の明なるに世人の之を混同するは何ぞや蓋し皮相の爲に欺かれたるものにして無理ならぬとあるなり試に歐米の文明國の人民を見るに此範圍內より越絕するものは尠かくして大抵は耶蘇敎を奉じたるものなるを以て終に世人が宗敎と洋學とは名こそ異なれ其實は同物なりと誤認するに至れるなり」然りと雖も洋人は兎もあれ角もあれ我邦の洋學者必しも耶蘇を信せざれば縱令洋學者の說は孔子樣の御流儀と異なる所ありと雖も强ちに耶蘇の說に非ざるなり其人亦必しも狂人にもあらざるなり我輩切に士君子に希望す新出の議論が如何に諸君の先入の說に違ふとあるも必ずしも狂說妄言のみに非ざるが故に猥りに之を拒絕するとなく唯理の在る所を目的となし共に討論研究すべきなり頑然として舊說に固執し却て自己の文旨の恥辱を暴すをなすとなかれ我輩は自己の胸間の鬱結を解き幷せて世の抱惑の諸君に示さんとを庶幾し爲に敎學兩岐の辨解を作る

『朝野』の雜錄に曰く。

濯上ノ秋色

澪上子一夕澪上ノ堤ニ歩ス秋氣肅然トシテ新霜將ニ飛バントシ落木蕭々トシテ四顧スルニ行人無ク唯ダ老蘋枯荻ノ空船ヲ擁スル有ルヲ見ル澪上子嘆ジテ曰ク噫衰ヘタル哉我ガ鄉ヤ夫レ春風駘蕩トシテ櫻雲空ヲ蔽ヒ香園紛陣ノ長堤十里ニ充滿スルニ當テハ酒樓茶肆到ル處繁華ノ氣象ヲ競ヒ金弦鳴リ綠酒漲ル千金一擲以テ澪上一夕ノ興ヲ買フ者日ニ陸續トシテ來ル亦盛ナリシニ非ズヤ然ルニ今ヤ紛奢全ク迹ヲ歛メ寥々索々トシテ歌舞ノ暖響ハ寒雁ノ哀韻ニ化シ裙釵ノ嬌態ハ殘柳ノ踈影ト變ゼリ誰カ復タ一樽ノ濁醪ヲ提ケテ水東ノ勝景ヲ來リ訪ハンヤ同ジク澪上ノ地ニシテ榮枯ノ瞬頃ニ變ズル斯ノ如キハ亦タ驚カザルヲ得ザルナリ一釣客有リ竿ヲ抛チ澪上子ヲ顧ミテ曰ク叟何ゾ喃々タルヤ夫レ澪上ノ地春來レバ忽チ繁華ニシテ秋到レバ忽チ憔悴ス夫レ年々同ジク然ル所ナリ今ニシテ衰フルモ春風一タビ花ヲ綻バスノ時ニ至ラバ再ビ其豪華ヲ見ルヤ必セリ何ゾ爲メニ傷悼スルヲ須ヒシヤ若シ夫レ之レヲ大ニシテ一國之ヲ小ニシテ一都其ノ人民漸ク窮乏貧困ノ域ニ陷リ賈スレモ贏利ヲ獲ズ工スレモ衣食ニ足ラズ日ニ以テ凋瘁シ往ク處トシテ苦ヲ訴ヘ痛ヲ呼バザル無ク男子ハ化シテ盜竊兒トナル者多ク女子ハ變ジテ利窠子トナル者多キニ至リ一般ノ社會毫モ活潑ノ生氣無ク喘々然トシテ死ト隣スル如キ形狀有ラバ其憂フベキ果シテ如何此ヲ是レ顧ミズシテ徒ラニ花木ノ榮枯ヲ哀ミ時氣ノ冷熱ニ感ズルハ痴ニ非ズシテ何ゾ澪上子赧然トシテ謝シテ曰ク僕過テリ夫レ花木ノ凋殘スルヤ之ヲ醫スルノ術ナキニ非ズ彼レニ殷七々有リ我レニ花咲爺有リ凉秋ノ天モ亦化シ

テ三春爛熳ノ候ト爲ス可シ若シ夫レ一國一都ノ凋瘁スルハ誰カ能ク之ヲ醫スル者ゾ先生幸ニ僕ニ敎ヘヨ釣客啞然大笑シテ曰ク我レ知ラズ〳〵叟若シ之ヲ知ラント欲セバ試ニ之ヲ此ノ水中ニ住ム巨頭長髯ノ魚ニ問ヘ

祭舌文

明治十年二月十三日澤上子齋戒沐浴シ恭シク一壜ノ葡萄酒ト一臠ノ牛肉トヲ具ヘテ自ラ其舌ヲ祭ル其文ニ曰ク嗚呼吾ガ心ハ謹愼ニシテ吾ガ膽ハ縮小ナリ生來未ダ嘗テ狂暴悖戻ノ事ヲ爲サズ然ルニ汝三寸ノ贅物妄リニ喋々トシテ遂ニ意外ノ禍害ヲ招キ吾ヲシテ飛ンダ迷惑ヲ爲サシメタル思ヒ出ダセバ去年今月今日ニシテ即チ一周年ノ忌辰ニ當レリ其日ノ景況ハ如何ナリシト思フゾヤ天色慘澹トシテ朔風雪ヲ捲キ早朝墨水ノ家ヨリ本社ニ至ルノ間既ニ

五臟モ凍斷セントシタリ既ニシテ後事ヲ託シ社員ニ別レヲ告ケ本社ノ編輯長末廣氏ト同車シテ町用先生ニ隨從シ法廷ニ出レバ風愈ヨ烈シク雪愈ヨ劇シ竟ニ汝ガ罪戾ニ坐シテ辱ナクモ四箇月ノ禁獄ト一百圓ノ罰金ヲ頂載シタルハ實ニ本日ノ十一時二十分比ニテ有リキ汝平生巧ミニ辨シ細カニ論ズルモ是ノ時ニ當テハ最早一言ノ以テ吾ヲ救フヘキ權力無ク默々トシテ吾ガ獄卒ノ爲メニ叱咤セラルヽヲ傍觀シタルノミ風雲ノ漫々タル中ニ徒跣シテ獄門ニ到ルノ際吾ガ肌膚ハ身ニ粟シ吾ガ手足ハ盡トク龜ス衣ヲ解キ褌ヲ脫シテ獄吏ノ檢査ヲ受ク嚴寒ノ身ニ逼ルヤ吾ガ齒牙悉ク戰フテ汝獨リ晏如タリ亦何ゾ不人情ナルヤ其幽室ニ鎖サルヽニ及ンデハ鐵檻木扃凜乎トシテ一星ノ火無ク簌々タル雪片ノ來タッテ窓ヲ撲ツノ聲ヲ聽クノミ坐ニ

一帙ノ書無ク身ニ伴フモノハ唯ダ糞桶唾壺ノ二物ノミ豈又馬鹿々々シカラズヤ然ルニ汝ハ毫モ吾カ心ノ憂悶ナルニ關セズ飯來レハ之ヲ食ヒ茶來レハ之ヲ飲ミ欣々然タル擧動平日ニ異ナルコト無カリシ亦何ソ不人情ナルヤ加之獄則ノ嚴ナル吾ガ心惴々トシテ遵奉ノ暇有ラザル也獄吏來レバ叩頭シ獄卒來レバ頓首ス猶土百姓ノ戸長先生ニ出遭フタルガ如シ然ルニ汝ハ動モスレバ平生ノ惡癖ヲ發シ來リ時々得意ノ詩文ヲ吟誦シ或ハ隣房ノ人ニ私語セリ是レガ爲メニ恐ロシキ呵責ヲ蒙リ殆ド吾ガ肝ヲ潰シ吾ガ腸ヲ裂カシメントシタリ亦何ソ不人情ナルヤ幸ニ天公ノ吾レヲ愛憐スルト吾ガ精神ノ外物ニ屈撓セサルトヲ以テ纔カニ獄中ノ鬼トナルヲ免レ再ビ娑婆世界ニ出テヽ縱放不羈ノ身ト爲ルヲ得タリ豈危ウカリシニ非ズヤ抑モ汝ハ六國ノ相印ヲ佩フルノ能モ無ク又七十餘城ヲ下ダスノ力モ無ク常山賊ヲ罵ルノ烈ヲ學ブ能ハズシテ反ツテ軹生客ニ死スルノ拙ヲ免レザラントス亦哀シム可キノミ然リト雖トモ吾ガ平生ノ生計亦汝ニ賴テ立テリ豈一時ノ慘禍ヲ受ケシガ爲メニ汝ト絶ツノ心有ランヤ吉凶榮辱將ニ汝ト永ク相終始セントス今ヤ一周年ノ忌辰ニ値ヒ思舊感今ノ情ニ堪ル能ハズ聊カ懇々ノ襟懷ヲ陳ス汝其レ言ハント欲スル所ロ有ル耶汝將タ食ラハント欲スルモノ有ル耶汝其レ遠慮スルコト莫レ嗚呼可笑イ哉尙饗

成島柳北氏

此『朝野』雜錄の二篇は實に湿上漁史成島柳北翁の筆する處にして。今日より見れば聊か小學兒童の口氣を帶び來るが如しといへども。當時之を名文として愛讀せしを思へば。漁史の文また以て社會進歩の度を反射せしものと謂はざるべからず。柳北翁い

實に當時文章家の泰斗たり。當時諧謔家の巨擘たりしあり。嘗て『日々』紙上に福地氏の文章平易ならざる可からざるの論を出だし。一農夫の借金を催促するに『借金はなせ越さぬ。越さぬならおれが行く。おれが腕には骨がある』と書き送りしを引きて。專ら其俗文の妙なるを說く。柳北翁之を『朝野』紙上に評して。先生何ぞ『國會はなぜ立てぬ。立てぬならおれが書く。おれが筆には骨がある』といい書かざるやと。當時傳唱して人皆其好く笑いするを感心せり。翁い末廣重恭氏と共に編輯局長の任を分擔し。末廣氏を『上戸局長』と爲し自ら『下戸局長』と爲りたるが。後また隱居して『火の番』と爲りたるの滑稽も此頃なりき。

横字新聞

是より先。京濱の間に於て西洋人の横字新聞を發行するもの多く。曰くジャパン、デーリー、ヘラルド。曰くジャパン、ガゼット。曰くトウキャウ、タイムス。(以上英文)曰くレコ、デュ、ジャポンの類いよ〳〵盛大を極め。探訪を密にし論說を新にしつゝ勉强するあるが爲めに。我國の新聞また日に其新機軸を出だし。月に其新趣向を凝らさんとす。之を明治初年に比して。八九年頃の景況を觀る時は殆んど人生幼時と壯時との差も啻ならず。明治初年より十二年までの計算に由れば。發行せし新聞の種類凡そ五百もありしと云ふ。豈盛なりと謂はざるべけんや。

新聞發行の數

其六　雜誌の刊行

讀者は前文を讀んで明治十二年以前の新聞の數を知れり。今また雜誌の種類を數ふれば

雜誌の種類

時事論說を載するもの……十
敎育宗敎に關するもの……二十六
官令法律を載するもの……六

經濟商法を主とするもの……二十九
醫學工藝を主とするもの……二十六
文學兵事に關するもの……十九
小說の類に關するもの……十三

にして合計百二十九種ありしと云ふ。中にも時事の書生評論を掲ぐるものには

評論新聞
草莽雜誌
近事評論
攪眠新誌(大坂)

あり。學者の論說を聞かんとするには

明六新誌
共存雜誌

あり。慶應義塾の

家庭叢談

は書生就學の方向を示し。朝野新聞社の

花月新誌

は詩文雜誌の鼻祖にして濃上漁史實に之を編輯せり。ポンチを以て時を諷する

團々珍聞

の生れしも此時にして。隈藪卒讀するに堪へざるの名を得たる

東京新誌

の顏を出したるも亦當時にありしなり。

其七　守舊學派

曰く雜誌。曰く新聞。曰く外國語學。曰く翻譯文体。ありとあらゆる

新文學創造時代の形況をば語りたり。然れども未だ前代遺物の其間に存しつゝある事は讀者或は知らざるべし。明治維新の革命は實に舊習を一洗して新天地を開闢せしものなりき。而して此開闢せられし新天地に入り込まんとするものに二者あるを忘るべからず。二者とは何ぞや。曰く幕府轉覆の主動者たりし國學神道の再興。曰く舊習打破の勸奬者たりし洋學洋風の流行。是なり。後者の事は既に言へり。國學神道の維新後に於ける勢力は如何なりしか。讀者また之を知らんと欲するならん。

國學の維新後勢力

うも〳〵國學神道が德川幕府の下に如何なる待遇を受けしかといふに。諸君も知らん。平田篤胤氏は其晩年に著述を禁ぜられ。江戸に住居相成らざるの嚴達に遇ひたる事を。實に國學者は幕府に嫌はれしなり。幕末に勤王攘夷を唱へて獄中の鬼と爲りたるものは概ね國學の徒たりしなり。維新の大業一たび功を奏す

平田風の國學おこる

るや。朝廷大に國學の徒を用ひて復古の政を佐けしめ。京都には大學を置きて大に平田風の國學(謂はゆる皇學なるもの)を興し。更に教部省を置き教導職を設けて皇道を說き神教を布かせ給ひしかば。おのづから開進主義の流行する反動として。平田門に入り平田風の學問を爲すもの日一日よりも多きを加へぬ。されば明治六七年の頃に至りては東京に來り集まる書生或は教導職と爲り神官と爲るを目的とするもの〻少なからざりしは。當時書肆の店頭を埋めたる青表紙と黃表紙との書名を讀みて大方〻知られん。余が記臆に殘るものを揭ぐれば

古訓古事記　古史成文
古語拾遺　祝訓正訓
古道大意　古道訓蒙頌
神德略述頌　古學二千文

皇典文彙　玉鉾百首
古道大意　俗神道大意
西籍慨論　出定笑語
靜の岩屋　伊吹颪

の類之に加ふるに教導職試驗問題を解きたる如きもの數ふるに暇あらざりき。以て彼の福澤學風に對陣しつゝありしなり。

楠權論

『學問の勸め』一たび現いるゝや。或は楠公の忠死を權助の首くゝりに比せし。とて『楠權論』を『日新眞事誌』に寄せて駁擊するあれば『福澤氏ハ楠公ノ忠臣ナリ』と『報知新聞』かに論じて近來楠公の社を所々に建築するに至りしは全く其反動なりといふもありて。一時新舊二學派の爭は世間に喋々しかりしなり。

歌は如何

篤胤氏嘗て詠じて曰く『月花を我もあはれと見てはあれど。あはれとうたふ暇なかりけり』と。平田の學風は詠歌の彫琢を事とせざるなり。然れども慷慨悲憤の情之を有りのまゝの言葉に發して以て歌ふは。亦其學風の常なりしが故に。此時代には文學上の歌おこらずして謂はゆる『議論より實を行へなまけ武士。國の大事をよそに見る馬鹿』的の作おこなはれしは蓋し時勢また之を然らしめしに因る。嗚呼歌なり詩なり其文學上の作を當時の創造時代に求めんとするは抑も魚を山に漁するの類なり。眼を轉じて他の詩界の有樣を見よ。『陸軍學佛海軍英。舊習一新兩至精。請見他年大成後。神威却壓二州兵』『才子負才愚守愚。少年才子不如愚。誰知他日成功後。才子不才愚不愚』の如き口吻のもの最も世に行はれ。湯屋に牛肉屋に其吟聲を聞きたる時代よ非ずや。

夫れ此くの如し守舊學派と開新學派との相遠ざかり相衝突するの甚しきは。一は東せよと勸め一は西せよと說く。而して文學といふ觀念に至りては彼も此も未だ有らざりしなり。そも〳〵

國學者は舊幕府を倒すに於てのみ力わりしもの。豈洋學者の新社會を進むるの方向に羅針盤を取りしものと其功日を同じうして語るを得んや。而して此くの如く國學者の空論に傾き洋學者の實利を主とせしものが。他日相親睦し相指導するの曉に於て。一は形を古文學に變へて社會に現はれ。一は聲を新文學に發して世上に立ちつゝ復た軋轢の跡を見るなきに至らんとす。抑も亦時なるかな。

其八　結論

總論を讀みたる諸君は知るらん。文學は政界の出來事都合よくして社會多忙ならざる時に發達するものぞと言ひし事を。概していへば今日とても世間萬般の事業わづかに改良の緒に就き。やゝ進歩の途に向へるのみ。未だ人心閑を得て餘ある時節には達せざるなり。加ふるに有形の文明を取り來れるの忙はしき。豈食はずして歌ふの迂を學ぶの暇あらんや。之を庭園を造るに譬ふれば。岩石樹木の配置わづかに成りて其根に培ひ其發育を望むの時。いまだ苔蘚細かにむし百卉笑ふの美を期する能はざるは固よりならん。文學が社會の裝飾なることは既に言へり。此かる社會に於て其裝飾たる文學の發達を見がたきこそ自然の勢なれ。殊に維新後十年間は創造時代の猶創造時代にして有形無形共に海外より取り來り。其配置の具合を見定むるに於て暇なかりしかば。獨り文學のみならず。諸般の事すべて其特殊の發達を望む能はず。寧ろ之を勸奬する者も無かりしあり。

既にして配置漸く成り。雨降りて石土固まらんとするに際し。不幸にも再び社會を震動せしむる一大事件は起り來れり。今や征韓論は破裂して西南戰爭と爲らんとす。世人の耳目は等しく此

政事の局面に向つて注射せり。寧ろ靜に机に對して文字の上に其思想を馳せしむるの餘裕を有せざりしなり。此に於て西南事件は僅に其基礎を固めんとしたりし文學社會を再び根底より動かし始めたり。岩石は轉倒せり樹木は萎靡せり。是より數年の間。文學園はしばらく寂寥の中に立たんとす。

(三)第二期……謂はゆる反動時代

(一)總論

戰爭の影響

戰爭は如何なる時代を問はず。著るしく衆人の注目を惹くものあり。其結果は社會の上層より下底まで極めて大なる影響を蒙るものなり。殊に西南戰爭の起れるや。維新の創痍未だ全く癒えざるの時に當つて。其創造の社會を動搖せしめたるが故に。第一期に於て漸く發せんとせし文學の萠芽は無情にも引拔かれたり。故に戰爭終つて數年の間い文學上に一も見るべきものなかりしは少しも怪しむに足らず。唯此時に於て殊に注目すべきは。新聞紙に對する影響と。一冊讀切の小本の續々出版せられたること是なり。

新聞紙の進運來る

我國さきに西洋の文物を輸入し來りてより。新聞紙は中んづく著るしき發達を爲すべき徵候をあらはしたれども。平常の時に於て平常の進歩を爲すに過ぎざりしが。此戰爭の新聞紙に對して莫大の刺擊を與へし事は。疑ふへからざる事實ありとす。見よ是までは空論を羅列し公文を記載し若くは外國新聞を翻譯して紙面を埋めし新聞も。今や進んで探訪の業を擴張し。戰爭の記事を最も早く報道せざるを得ざるに至りしが故に。其結果として新聞事業は競うて機敏を加へしに非ずや。又一方に於てい從來新聞紙を購讀するものは都下に在つてい中流以上の人。地方

小冊子多く出づ

洋風大に行はる

に在つて官吏其他少數の人に過ぎざりしを以て販路極めて狹かりしが。戰報一たび世人の耳朶を襲ひしより。甚だ廣く購讀せらるゝに至り。從つて其業に從事し刺擊と發達とを與へしに非ずや。加ふるに戰爭の報知を載せたる小冊子は多く發兌せられ愛讀せられつゝ文學上の產物を促し來らんとす。『明治太平記』は其最たるものなりき。

戰爭は終を告げ西洋心醉の政事家は內閣を組織せり。西洋の風俗習慣は社會の上より下より喜んで迎へられたり。社會の交際場裡に馳せんとするの紳士は。今や競うて洋服を着し洋帽洋靴を穿ち。其乘る車を洋風にし。其居る室を洋風にし。以て後れざらん事を欲す。其流行從つて亦女子社會にも及べり。女學生は靴を履かざるべからず。洋書を携へざるべからず。エー、ビー、シーを筆にしエース、サンキューを口にせざるべからず。外形すでに此くの

民權論自由論起る

男女同權論

如し。精神多少の西洋主義を取らざらんと欲するも得べけんや。民權論は起れり。自由論は發達せり。男女同權は盛に喋々せられたり。謂はゆる民權論とは天賦人權說より脫化し來れる者にて。人はおの〳〵權利を有す。人に上下の區別あるべきなし。人はすべて平等なり。故に自由に其權利を主張せざるべからず。民あつての政府なり。故に一國の政は人民の意思によつて左右せられざるべからず。人民の意思とは謂はゆる輿論なり。輿論に反する事ゝ如何なる政事家といへども行ふべからず。といふが如きは。是ぞ民權自由二論者の唱へしところにして。其甚しきに至つては共和政治を說くものさへありし程なりき。男女同權論は亦其變体せしものにして。人に男女あるゝ權利の異同を謂ふに非ず。女は男と等しく神聖なる人類としての權利を有す。是まで女子の男子に壓制せられたるゝ天理に非ずして事實(フヮクト)なり。男子豈女

理屈論の結果

子よりも多くの權利を有すべき理あらんやと。是ぞ其論者が唱ふるところなりしは讀者も記憶するならん。是等の空論果して文學に影響せしところ如何なりしか。殘念にも文學い之が爲め何の助をも蒙らざりしなり。およそ文學は理屈の發達と共に衰頽。否。趣味を變化するを常とす。彼の民權自由男女同權の理屈論は。當時の文學者をして筆を文學に專にするの暇なからしめ。著述にも新聞にも。到るところの製作物を無味冷淡ならしめたり。此くの如きものは實に十年の西南戰爭を距る數年間の形況にして。之を無文學の暗黑時代なりと謂はんも亦不可なからんとす。然れども政府は社會の羅針盤を握りて公衆を指導するの務を有する以上は。暗黑の中に在つても其取るべき方針を見出だし。或は一點の星光により或は一閃の火影によりつゝ安全に其職務を盡さゞるべからず。政府が先に學制を設け敎育令を發し。

政府の文學裝勵

漢學の衰頽

假名羅馬字の二會

各地方到るところに學校の旗を望み呼唔の聲を聞くに至らしめし事は今更いはず。東京大學文學部に和文科漢文科を置きて東洋文學の研究發達を奬勵し。學士會院を設けて碩學鴻儒を優待し。修史館を開きて歷朝事蹟を講究せしめ。敎育雜誌を刊行して敎育事業の普及を圖りたる等は。皆此暗黑時代すなはち西南戰爭後の出來事として記臆せらるゝなり。

西洋の思想普く入り來りたる結果として當時漢學は甚しく排拆せられたり。其目的を達せんとして『かなのくわい』『羅馬字會』は新設せられたり。外山文學博士が『余ハ假名ノ會羅馬字會ヲ問ハズ。漢字ヲ排擊スルモノニハ何デモ贊成スル』と言はれしも實に此時なりき。今や假名の會とは如何なるものなりしかを社會より忘れられんとするに當り。いさゝか紀念を遺さしめんとするも强ひて無用にあらざるべし。請ふ左の文を讀め。

さるめいぢ六七ねんのころ、せうがくかうをまうけられてより、をとこもをんなも六さいより十四さいまでは、かならずいりてまなぶべきことなりたれども、いづれのけんにても、をんなのせいとは、をとこの三ツ一にもたらず、たとひひとたびせうがくかうにいるとも、うのゑりぞくことはやきをもツて、をんなのちゑきは、つねにをとこにおとり、これとかたをならぶることあたはず、これによりてみぶんもゑたがつておとれり、これむかしよりたゝかひをてのみたるきふうのさりやらぬと、こうしゑやかなどのをしへの、まだひとびとのこゝろにゑみわたれるとによりてのことなり、

是れ『めいぢ十九ねん七ぐわつ十五にち』を以て『かなのくわい』より發兌せし『かなのてかゞみだい一がう』に載するところの論說中の一章なり。此會たして漢文を排擊するの目的を達せしや否を此に論斷する能はずといへども。其他日和文學發達の伏線を爲したるは爭ふべからざる事實なり。羅馬字會に至つては當時の大學教授全力を之に注ぎて其必要を說き。社會に向つて大聲疾呼せしにも拘はらず。殆んど何等の影響をも文學上に留めざりしと論斷するを憚らざるなり。

其二　小說界の繁昌

小說――少なくとも文學上の製作物――の最初の著作ともい

ふべきい報知社に其人ありと知られたる

藤田茂吉

氏の

文明東漸史(十七年九月)

なるべし。此書は米艦一たび浦賀に來り以て西洋の文明を東方に齎らしたるに筆を起し。高野長英渡邊華山二氏の傳を全篇の堅として其間に義人烈士の美談を挾み以て之を横とせり。されば歷史上の著作とも見るを得べく。政事小說とも見るを得べく。又一篇の文明論なりとも見るを得べきなり。其一章を示さば

天保十年正月幕府監察鳥居耀藏に命し浦賀の海岸を測量し砲臺及船艦を檢査せしむ代官江川太郎左衛門其所轄の地なるを以て幕府に請ふて鳥居と共に巡檢の事ゝ任す鳥居は林大內記衛の次子大學頭煌の弟にして儒家出身の人

なり爲人陰險猜忍權畧に富めり當時蘭學の世に行はれて儒生往々西學に心醉し林門の弟子亦烏跡を去てゝ蟹行に就く者あるを憤り殊に渡邊華山は一たび贄を林門に委し當世の名流を以て稱せられたるに今西學社中の牛耳を執り頻りに蘭學を主唱するを見て頗る不平の色あり會ゝモリソン渡航の論說華山の徒に出てたるを以て私かに閣老に陳訴して曰く英人渡航の事畢竟荒唐の談にして近來夷狄の學に心醉せる者の主唱する所なり彼輩妖言を吐て上廟堂を蠱惑し下民心を煽搖す眞に化を亂るの民なり請ふ夢物語等の書を著する者を捕へて悉く之を嚴法に處せん而して夷狄の學は邪說の根本なり宜しく之を禁せざる可らず然らすんば後來國家の大患を生するあらんと此言は當時に行はれさりしと雖ども多少要路の人を動かしたる

を知るべし

之に續いて同社の牛耳を執りたる

矢野文雄

氏は

齊武名士　經國美談（十九年十一月）

を出だせり。此書い前者よりも猶一歩小説に向つて近づき來り。然も政事小説の錚々たるものにして明治年間に於ける文學上著作の中にて。最も廣く讀まれしものと謂はんも不可なからん。文章流暢にして趣向亦奇。讀むものをして絶えず快と呼ばしむ。左に拔萃せるは亦その妙處の一なり。

巴氏ハ其病ヒ日々ニ重リシカ一夜暗燈ノ下ニ在テ熟々既往將來ヲ想ヘハ悽愴感概ノ情自ラ止ム〻能ハズ前キニ本國ニ於テハ危クモ追兵ノ難ヲ免レ又タ途中ニテハ溺死ノ

厄ヲ救ハレ阿善ニ於テハ幸ニ刺客ノ難ヲ避ケ又其人民ノ厚意ニ因テ僥倖ニモ斯波多ノ强迫逮捕ヲ蒙ラス今日マテ天ノ祐ヲ得テ斯ル千辛万苦ノ中ヲ恙ナク歴來リシニ今若シ一朝病苦ノ爲メニ此處ニテ死失セナバ今マテ辛苦ノ甲斐モナク我濟民ノ大業モ空ク泡沫ト消ヘ行クヘシ若シ此病ノ癒ヘサランニハ如何ニ口惜シキ事ナルヘキカ昨日ニ比ラヘテ今日ハ又最ト〻苦痛ヲ增シタルハ我身モ天ヨリ棄テラレタルカト獨リ臥床ニ嘆チツ〻窓ヨリ外面ヲ打チ眺ムレハ月ノ光リハ朦ケニ見エテハ隱レ、隱レテハ又現ハル〻有樣ハ有爲轉變ノ世ノ中ニ能クモ相似タル景色カナト尙ホモ悲歎ヲ增シケル折シモ遙カノ彼處ニ琴ノ音シテ歌ノ聲サヘ聞ユレハ巴氏ハ耳ヲ欹テツ〻斯ル田舍ノ片山里ニ優シキ調ベヲ聞クモノカナ如何ナル人ノ手スサミニ

テ斯ル妙音ヲ奏スルヤト憂キカ中ニモ病苦ヲ慰メ暫時彼ノ音ヲ打聞ク中ニ琴聲次第ニ近ツキシカ此家ノ窓下ニ立止リ又一曲ヲ奏シツヽ

歌　見渡セハ　野ノ末山ノ端マテモ　花ナキ里ソナカリケル　今ヲ盛リニ咲キ揃フ　色香愛タキ其花モ　過キ越シ方ヲ尋ヌレハ　憂キコトノミゾ多カリキ　霜降ル朝ニハ葉ヲ隕シ　雪降ル夜ニハ枝ヲ折リ　枯レシトマデニ眺メラレ　集リ會フ憂キコトノ　積リ積リシ其中ヲ　耐ヘ忍ヒシ甲斐アリテ　長閑キ春ニ巡リ逢ヒ　斯ク咲キ出ルソ愛タケレ　世ノ爲ニトテ誓ヒテシ　其ノ身ノ上ニ喜ノ　花ノ苔ハ憂キ事ト　知リナハ何カ憾ムベキ　春ノ花コソ例ナレ　春ノ花コソ愛タケレ

春廼舍主人出づ

ト最ト面白ク歌ヒケレハ巴氏ハ大ニ打チ驚キ是ノ歌ハ之レ數年前我ガ本國ニ在リシ頃戯レニ作リタル春ノ花テフ短歌ナルニ之ヲ歌フハ心得スト思ヘハ歌ヒシ其聲ハ兼テ聞知ル音聲ナレハ巴氏ハ窓ヨリ差シノソキ月ノ光ニ透シ見ツ忽チ思ハス聲ヲ揚ケ

其所ニ立チシハ禮温ニアラスヤ

ト問ハレテ驚ク樂人ハ一時ハ驚キ極リテ未タ答フル辞モナキウチ又モ巴氏ハ聲ヲカケ

禮温ニアラヌカ過マリシカ

ト聞クヨク彼方ハ振リ仰キ

然カ曰フハ郎君ナラスヤ禮温ニテコソ候フナレ

ト見上ケ見下ス主從ノ其ノ悦ヒハ如何ナラン

此時にあたり『春迺舍麗』の別號を以て知られたる

坪内逍遙

氏い多年大學に在りて英國文學を研究し業を卒へて社會に立つや

該撒奇談

書生氣質

妹背鏡

未來の夢

小説神髄

等を著はせり蓋し小説に向つて最も多く世人の注目を惹かしめしは氏が是等の作に始まりしならん藤田矢野二氏の著の如きい讀まれたる事は極めて廣しといへども其文學の作もしくは小説たるといふ點に於ては別に世人に注目はせられざりしなり逍遙氏は大學に在りし日より小説に就いて研究せし人なり是等の著作は氏が小説に對する理想を現はさんとがために出だせるなり豈一時に喧傳して最も多くの評判を買はざらんと欲するも得んや此に於てか文學なるものは殆んど小説のため專領せられ盡せり史學あれども形を潜め哲學あれども影を隱し唯小説のみ獨り大手を振つて跋扈を極むるに至れり

逍遙氏は啻に小説なる名を流行せしめしに止まらず小説の實を改良擴張せんと勉めしなり故に我國在來の小説を以て多くは現實社會より隔たれりと爲し唯うの著者が自身の現想とする處のみを書がゝんとするに過ぎずと爲し大に是等舊体の小説を排擊して西洋風に習ひたる作を出だしたり かのめでたし〳〵的の舊体跡を絶ちて圓滿に其局を結ばざる悲哀小説の行はるゝに至りしも全く氏が筆を執つて之を開きしに因る豈小説界のために之を謝せざるを得んや

書生氣質

（繼）そいつは我輩の願ふ所だ親父の供給が絶えてからは我輩も實に究したから。何か金儲をしあくつては。下宿の拂もできやアしない早速周旋してくれたまへ。うれしやア今朝ッからやつて居るのは。即ち其Translation（飜譯）か（山）さうヨ見たまへ雜と如斯体裁さ（繼）どれ〳〵ト言ひながら山村譯しかけたる原稿をとつて見る（繼）ヤア隨分亂暴な飜譯だな。エトなんだ……是ニ因テ之ヲ觀レバ陪審裁判トイフ制度ノ因テ以テ原因セシ所以ノ道理ハ。蓋シ遠隔ナルサキソン時代ノ王政ノ頃ニアリシヤ決シテ疑フ可キ事ニ非ラサルナリト余輩ガ信ゼザルヲ得ズト斷言セザル可ラザル事トイフ可シ……ハヽヽヽイヤニ冗長な曲りくねッた變に讀惡い文章だあア羊の腸よろしくたア如斯文体をいふンだら う就中「因テ以テ原因セシ所以ノ道理」なんざア實に重複極

るじやアないか。ナゼこんなに文を延すンだろう反語ばかりいやに重なつて。惡讀くッて解りにくゝッて是じやア素人にやア解りやアしあいせ（山）ハヽヽヽぶつゝけがきだものを。文はどうせ無茶苦茶さ。玄かし長くしたは此方の策さ。反語を澤山つかッたり。同じ事を繰返して居りやヤ骨がちつとも折れないで以て直に一枚だけ出來るだらう。何々せずんばあるべからさるありと歟。それ然り豈それ然らんやなどゝやつて居ると。十行二十字は二十分位に一枚かけッちまふ。是之を（エコノミイオフレイボル）economy of labour（はねはりの儉約）といふ（繼）ヤレ〳〵斯いふ飜譯者の手に成た。飜譯書を買ふ奴は可憫だ。しかし我輩も其法でやらかそう。二三枚原書の散亂になつたのを貸たまへ（山）ヲット承知だ。それじやアペイジ。トエンチー（二十葉）から○かうット○ペイジ。サルチー（三十葉）ま

で、君にやろう。汗牛堂へは明後日ゆくからなるべくせいだして譯したまへ。十枚で二圓五拾錢にやアなるから《書生氣質》

・・・・・・・・・・・・

時しも八月のはじめつかた。夕陽西にかゞやきて夕立全く收まり。虹麗しう引渡したり。今しも九段阪を登るとて。共に人車より下り立たるは。そも是如何樣なる人物ぞ。一個は年の比十九あまり。絽の重ねを涼しげに重ね被て。傘深やかにうちかざしけり。一個は年の比廿三四。誰が目に打見やるも下婢なるべし。坂の中程に至りしとき。下婢は牛が淵の方をゆびさし。娘に打向ひて聲をひそめ

(下女)お雪さま……奥さまごらん遊ばせ。こゝがアノ何でございますヨ。あのお辻さんが身を投げました所で。

(お雪)あゝさうだッてネエほんとに可憫的に……互ひに思ひあッて夫婦になッても……

トいひかけて歎息を吐き。あとをいひさして默然たり

* * * * * * *

* * * * * * *

お雪は悵然たる面をひそめて。

(雪)ヲヤ鎌とした事が何をおいひかと思ッたら……ヲヤマアとんでもない事を。ナンノわたしがそんな事を…………今……今いつたのはさうではない。わたしがお辻さんのやうな心で耻も後先も考へなければ……

(下女)エヽ。

(雪)死んでしまひたいと思ひますヨ。

（下女）とん……とんでもない事をおつしやいます。
（雪）イヽエサ生中に學問をしたのか。今じやア……今じやア眞成に……アヽわたしの苦の種だワ。
（下女）否ですヨお雪さま。うんなイヤアな事おいひ遊ばして。何で……何でマアあなたは……
トいひつヽお雪の貌打まもれば。
（雪）ナアニ何樣な悲しい事があらうと私は自分の手で死ぬのなんのと。そんな卑劣な事……爲は出ないがネ。ナニネ。れまへには話してもわからない。わたしの悲しさを知ッてる人は。日本に幾人もなからうと思ふワ。アヽあじきない身の上だワ。《妹脊鏡。終局》

新聞紙にあらはれたる影響

是より先き新聞紙は大に文學欄内に力を用ひ。殊に小新聞は艶麗なる文章を競ひ。或は圓滑なる筆を用ひて人情の微を畫がく事を勉むるやうになりたるが。逍遙氏の小説一たび出でヽ世の注目を惹くや。新聞雜誌に從事したりし文章家は又爭うて其筆を小説界に馳せしめんとするの傾を生じ。其影響は早くも東京大學の文學生に傳はりて又往々小説家たらんと志す青年才子を其中に見るに至れり。

新体作者の反動おこる

饗庭篁村

氏が小説家として名を博せしも此頃なりき。氏は逍遙氏および大學の人々とは大に趣を異にし。之に對しては寧ろ守舊派の位置にあり。氏が筆の輕妙にして又よく人情を穿てるは。讀賣新聞讀者の常に知る處ならん。其著作に大なるもの少なしと雖も。謂はゆる筆の枯れたるがために。之を讀みもてゆく内に覺えず妙と呼び快と叫ばるヽ處多し。

堀出しもの

苦樂
勝閑

等は其傑作と稱せられしものなり。氏は又大に馬琴を祖述し。之に關する研究に世人の眼を惹きたるは。逍遙氏と共に與かつて力ありとす。

篁村氏馬琴を祖述す

夕日は山のあなたに沒て尙ほ西の空に彩りたる雲を殘し飛鳥は林の方に向ひて輪の形ちに旋りて黑き群をなす丘の松は靑く蓋を張りし如く畑の菜の花は黃金を敷きしに異ならず細くして淸き流れい山を出て遠からず谷の奥なるおくれ咲の櫻の葩を乘せたり岸に一個の大岩あり斜めに川に望みて下より見れば今にも落ちんかと怪ぶまるれど岩の上には小松躑躅など生ひて宛然蓬萊山の形をなせり鬚なき太公望の休み處角を叩いて謠ふことなき寗戚の

堀出しもの

腰掛ならん此の傍らにまた平面なる石の川に出て水を掬ぶに人してわざ〳〵なせる如きあり根芹蒲など靑々として折々それに動くは魚の戯るゝにやあらん不意に水音をさするい蛙の飛入りしなり小田を耕す頃なれば水も過來し村々へ引かれぬ爲めか靜なれども常よりは勢はやし此へ一個の年若き農夫の來かゝりしが例の相識の石と見えて草の上へ辨當の包を置き石の上に下り立て先づ己が爲には正宗にも增す得物の鍬を流にて洗ひ次に脚半穿きたるまゝの足を濯ひたり脚半と見えしは泥にして洗へば淸き足となれり左れどそれを拭ひて疊附の駒下駄を穿かへるといふ譯にていなく其まゝまた跣足なり夫より泥だらけの顏を洗ひ次に水一口掬ひ飲みて始めて欣然と立て四方を見たり若し是を盥の水にてせば如何あらん先づ鍬を

洗ひ次に泥足次に顔を洗ひ跡にて其水を飲むとせば隨分汚なき事にして倒行逆施なゞゝもいふべし然れども流る川の清き事は玄ばらくも止らずして誠にしかも元の水にあらず此に臨みては斯くするが却つて順序の正しきなり嗚呼流るゝ水の清き事よ

若き農夫は我が一日の業を終れりと滿足げに四方を見たるが何か思ひ出す事ありけん潔よき眉を打ちひそめ亦一たびは眼を閉ぢたりやがて彼の高岩の上に立ち更に四方を見廻したり山は夕陽に赤かりしもやゝ薄くなりて白く黄を帶びたる空となり森は黑みて塒を爭ふ鳥の聲噪しく見渡す限りの村々は遠く近く竈の煙り立のぼれり若者は此の夕榮の景色を眺めて詩を案ずるか歌を詠まんとにや將た俳句を吟じ出さんとするか玄ばらくは眼を轉せど足も移さず立しまゝにて其身は立ちしまゝなる事をも忘れたる樣子なりしが頓て巖を下りて柔かき草の上に座りたり《堀出しもの。首章》

此時『有喜世新聞』《後の改進新聞》に

須藤南翠

氏あり。氏の文章は逍遙篁村の二將とも異にして寧ろ雄健の傾あり。然れども氏は又た他の文章を模寫するに巧にして。或は馬琴の如く或は三馬の如く。時としては洋文翻譯体の事あり。時としては漢文直譯体の事あり。變幻自在の妙を得たりとの評もありしなり。概して言へば氏の著作ハ其の舞臺廣くして變化に富みしば〳〵奇想天外より落つる事あり。少なからざる著作の中に

新裝の佳人

黄雛鸝
照日葵
朧月夜
こぼれ松葉(定時刊行)

等を以て其最とす。

旅世の憂目見えぬ山路へ入らんには思ふ人こそはだしなりけれと在五の君が詠給ひしを今も同じ文字なき歌とて吾も人も賞翫すなるは自然に出て同じ字を用ゐ給はぬ中將が巧を褒るのみなりしに今此山に分け入て歌の心の微妙くも實を寫し出せしを只管感じ想ふなり然はさりながら羈絆にと思ふ人には得遭ずして思はぬ雪に行患み此處を何處と問ふ人もなこその關を踰てより踏迷ひたる此山中常磐御前が艱ひし鳥羽の畷は里近けれど何れを見ても雪

より雪の白き峰上の其外には栞とすべき物もなき憂の山路に行暮ては宿借る賤が伏屋もあらじ今宵一と夜を如何して何を衾ま明すべき殊には痞塞の胸苦しく足さへ痛みて今はしも一足とても歩まれぬは守の神の不孝をバ責給ふぞと覺えぬる　と愀ひに沈み雨の手を呼吸の息に温めつゝまた仰向て天うち瞻望　旅はや日は全く暮しと見ゆるに何時まで此に佇立ても往返ふ人には得逢ふまじ思へば仄かに入相の鐘の音耳に入りたれば山寺にてもありぬべし寺ある時は里どても然までに遠き事はあらじ何れにもあれ行々て是非に一夜の宿請ん　と白問自答に心を定めまたも深雪を踏分けて覺束なくも辿らるゝ此の少年を誰かといふに今は其の名も女川氏力松としも呼るれど誠は名取の御息女糸萩姫が御果なり昔しは深殿後園に翠

帳深く垂籠て清女が才の香爐峰簾を掲けて見給ひし雪の眺望は身に積る今は旅路の雪の山手足の切るゝ冷たさに忍びて辿る林原狐兎の足跡幽かにも心憑めに往く姫が胸は氷も裂くばかりの憂想ひとぞ知られける斯る山にも栖む人のありと覺しく怪し氣なる丸木柱を結びかけ柴と草とに葺く家根も傾きかゝる粗壁に獸の皮を張晒し名のみは殘る草の戸の生垣のみい枝繁み厚く頂く雪の間に火影幽かに閃めくを糸萩姫の力松は認めて心嬉しくも足さへ自と進まれて件の門に辿りつき戸をはと〳〵と打叩けど雪に聲をや隔られけん應と答ふる人なきに力を極めて叩く戸の上に積れる雪散て顔に飛散る白妙の細き腕は猶止まず《照日葵》

同胞は相携さへて後園の方に進んが爲め霜溶に路を造りたる蓆の上を渡りて風流なる路次を入らんとせり恰も此の時逆しまに彼方より出來る美人の一群あり櫻町同胞と正しく相對し相突んとせり是れ一歩彼れ一歩約さねども踵を反して相佇、立めり、彼方よりは入るを待ちて此方を凝視し此方よりは出るを待ちて彼方を凝視するうちにも婦人の約やかなる眼は疾くも履物より着服帶より半襟、容貌、頭髪、櫛、金釵、根がけ、頸脚、毛際に至るまで微細に之れを觀察し盡し若し一歩を過んには其の後姿より運歩の風致をも見んとは願へるなり照子が衆くの目もて吾れを熟視せらるゝ間に觀察したる中に就きて殊に勝れて深く其の記臆に遺りしものは第二番目に在る處の美人なり若し單に「美」といふ語が萬能の働らきを有して之れに勝る形容詞の

なからましかば「美」なる語い此の婦人の爲めに固有專取せらるゝならん今眸子を凝して照子を視たる眼は愛の神……若しもあらば……の假に姿を變じて渠が双眼となりしが如く黑き眸子碧の眼夫れを覆ふ睫毛の長き槩ゆる美術家が意匠を凝し神を碎きて彫みたる人形とても之れには及ばじ、視て微笑を含みたる口は如何なる麗しき聲を包める歟側らに匂へる未開紅の莟ながらにして紅なりとも評すべし、細くして隆き鼻濃くして長き眉、殊に卵に肉づけたるが如き顏の嬋妍たる白き額に眉をも掩ふばかり惜し氣もなく剪り垂れたる前髪の娉婷たる夫れさへあるに濃き房やかなる頭髪を油氣もなく束ねて僅かに一輪一雪の薔薇花を挿して彩れる姿の清楚なる衣服はと問はゞ白き頸の間に見ゆる半襟は齒ひに對して澁きに過れども黑縮

緬の地の見えぬまでに鼠及び茶の二種もて雲形に縫繡たるものなり上に淺黃地に浮摸樣ある繻珍緞子の被布を纏ひ桃鶯色の總角胸の左右に流れたり下より出るゝ薄紅かけの裾摸樣におとなしき幽禪の無垢を襲ね絹足袋に塗下駄を穿ちたる姿の窈窕たる神女の肖像魂魄を得て再び人界に生じたるが如き威嚴をすら溢るゝばかりの愛嬌の裡に供へたり之れを照子に比するに連ぬる壁双の花精かに言はゞ照子の方は皮膚と品位とに於て渠に讓り昂き桟を以て渠に勝れるなり實に造化は妬み多くして萬全を與へず此の美人の一點の次所を尋ねんには只だ一の小造にして華奢に過るを數へんのみ

「チョイと兄さん」

「照子が忍び音」

「ウム分ッたヨ」

「同じ聲なる春行が答詞」

逍遙氏と執るところを同じうし。大學生風の趣味を有するを

嵯峨の屋おむろ

氏とす。氏は大に言文一致体を用ひ。其哲學的の眼光に照らして巧に人情の極處を穿てり。その作中殊ょ

初戀

は少年の一佳人に對する愛情を寫したるものにして。未曾有の妙篇なりと謂はんも敢て誣言にあらざるべし。

くされ、玉子

婿えらび

も其名高し。

扨暫らく此處に休んで居たが、自分達の組が大人を催促して、山奉行に別れて、再び蕨採に出掛た。今度は出掛るや否や直ちに採始た。自分は娘の傍を離れず、娘が採

初戀

る度に自分の採ったのと比較して見て負まいと思って勵んで居たが、此時はもウ蕨に氣を採られて、娘の事は思って居るといふ事は闇に知って居たので、所謂虫が知って居たので。――其飄へるふりの袂、其蹴返す衣の褄、其たをやかな姿、其美しい貌、其やさしい聲が目に入り耳に聞えるので、――其人の傍に居ると何處か幽に感じて居たので。其故一層樂しかった。不意に自分は向ふの薄暗い木の下に非常に生て居る所を見つけた。嬉しさの餘り聲を上ながら驅寄って手ばしこく採らうとすると、娘も走て來て採らうとするから採っては不可と娘をさゝへて、自分一人で採らうとしたが不可かった。自分は今まで採溜たのを、風呂敷へ入れて提て居たが其を今すッかり忘れて其風呂敷を手離して娘と

手柄を爭ッたので、風呂敷の中から採ッたのが溢れて四方に散るといふ大失敗周章て、拾集める中に、娘は笑ひながら一ッも殘さず採ッて仕舞ッた。

自分が見着たのを横取するのゝ非道い、返して下さい、と爭ッて見たが、娘は情强く笑ッて居て返しさうな樣子もないから自分は口惜くなり、やッきとなり、目を皿の樣にして、澤山ある所を、と見廻はした、運よく又見つけた、向ふの叢蔭に、が運わるく娘も見つけた。《初戀》

此頃よりして有形無形社會の進歩は漸く整頓し。世人の心やゝ閑なるを得たりしかば。當時の謂はゆる文學すなはち小説ゝ到るところに歡迎せられ。小説に對する世人の着目は其區域を擴めて。遂に往時の小説書類をさへ欲するの念を起さしめたり。此に於て或は馬琴或ゝ京傳。一九三馬春水種彦等の作は斷翰零墨

古小説の出板

兎屋

小説の交際社會に於ける影響

といへども人爭うて之を讀み。書肆は我劣らじと古小説を出板するの機運に向ひしかば。明治十五年には稗史出板會社まづ起つて里見八犬傳其他の著作を發刊せり。此頃南鍋町に兎屋と稱せし書店あり。自ら天狗書林と號し極めて廉價に書籍の出板を爲しゝかば。種々雜多の本は其紹介によつて世人の手に入りしは讀者或は猶記臆せん。井上勤氏が反譯に係る『八十日間世界一週』『海底旅行』『月世界旅行』『狐の裁判』等の諸書は此書店より出でたりき。然れども是等の書は眞の直譯に過ぎずして趣味に乏しく。高尚なる文學書もしくは小説として見がたきゝ誰も知りたるべし。

此くの如く文學上の著作おもに小説は廉價にて容易く世人の手に入る事と爲り。加ふるに上下久しく恬淡に慣れて其嗜好普く學生の間に衍はるゝに至りしかば。今や隨時發兌の流行小説

を知るに非ずんば交際社會に入る能はざるの勢を爲し。從つて小説家の名聲は都鄙遠近に喧傳せり。而して新聞社い爭うて小説家を招聘し。書肆は爭うて小説類を出板し尋いで小説雜誌の發兌を促し出だすに至りぬ。此に於て金港堂は

小説雜誌の發兌

都の花

を出だし。春陽堂は

新小説

を出だし。其後暫くして博文館は

大和錦

を。吉岡書店は

新著百種

を出だせり。此くの如く小説界をして賑はしむるに至りしものは。獨り前に述べたる二三小説家の力のみに非ず。抑も亦氣運の然らしむるものありしなり。

是より先き森田尾崎幸田等の諸氏出でゝ名聲やゝ喧すしく。れの〳〵文壇一方の將たらんとする趣あり。而して

森田思軒

氏最も其魁たるものあるべし。

氏は夙に報知社にありて洋文の反譯に從事し。其平素養ふところの漢學の力に加ふるに西洋文學の趣味を以てし。一種獨得の小説体を構造せり。其文たるや井上勤氏の如く無味ならず。又黑岩涙香氏の如く平易に流れず。寧ろ文學無きものに對しては佶屈にして解しがたき趣なきに非ずといへども。其粗大なる漢文体を以て緻密なる社會の裏面を畫がくの妙は。氏ひとり巧に之を得たりしなり。其著譯書の主たるものは

旨目使者

破茶碗

大叛魁

其他短篇のもの少なからず。

ある夏の夜甚だ蒸し熱して安らかに眠る能はざりければ

マリエッタは纔に曉に向ふを待ちかね其床より起き出でり

曙日の第一の光りは海波を射りレリニアンの小島を射り

更らに來りてマリエッタが小さき室の窓に當り輝やけりマ

リエッタは衣服を着け泉に赴き面を洗はんとて戸外に出で

たてりマリエッタは此の早晨の景色を賞しながら濱邊を散

歩せんと思ひしかバ其の帽子をさへ戴けり

泉に赴むかんとするには家の背後なる岩を越え棕櫚と橙

樹との間を穿ちゆかねはならずマリエッタは此のときに限

りて容易に是等の樹間を過ぐること能はざりし何となれ

ば今進みかゝりし前面の最も少かく最も瘠せたる棕櫚の

下に一個の身材長き少年が手のホトリに極めて麗はしき

花一束を置けるまゝ熟睡しをるを見たればあり花の上に

は一枚の白き紙の掛りて其紙は少年の呼吸する氣息に從

ひより〳〵アホち動きをれりマリエッタは之を奈何ぞ能く

輙すくコヽを過ぐることを得んや

渠は唯だ立ち止まりて戰慄せり彼の少年の何人あるやは

相距ること尚ほ遠ければ認むべからず、マリエッタは直ちに

家に歸り去るべき歟然れども若し此の機會に花の贈りぬ

しを知りなば知るべし若し此の機會を外さんには最早や

永久知るに由無かるべきなり、マリエッタハヌキ足さつゝ二

歩三歩棕櫚の下に進める折しも忽ち彼の少年の動くが如

く見ゆしかば直ちに身を飜へして家の方に走せもどれり

然れども少年の動けりと見えしは唯だマリエッタの恐怖せる想ひにて少年は依然として熟睡せるなり、マリエッタは再び棕櫚の方に進めり、漸く近つけば漸くに恐怖の念を加へつゝ今にも彼の少年の突然起りたゝん歟と思へば俄かにオノゝきて復た家の方に走せもどれり（破茶碗）

・・・・・・・・・・・・

渠は暫し息をつけり徐ろに首を廻らして四邊を顧みたれども唯だ夜色の涼然たるあるのみ

此の墻壁の内邊に幾多の喬木ならび立てり枝を交へ葉を重ねて相ひ茂みたるが其の板の長きものは頗る長くして且つ軟かなれば或は之れに縋して壁を下ることも出來べきが如くに思はれり

乞食僧は斯く思ひつくや否や直ちに彼の喬木の間に其身を沒したるが忽ち復た兩手に長くたはめる枝を握りもちつゝ墻壁の上に現はれ出でり

枝は渠の重みにつれて次第にたはみ垂れたるが其の一處の漸くにして墻壁の頂に觸れたるとき渠は徐ろに兩足を墻壁より離して左右の手をもて更る〴〵枝を握り換へつゝ次第に下りはじめり之を久くして渠は既に枝の末に至りたり去れども尚己れと地上とは相去ること三十尺（五間）餘りもあるべし乞食僧ハ今ま宙に吊るされ懸りたるまゝ左右の足を搖かして頻りに何等が足がゝりとすべき處もあらずやと求めたり

火光一閃復た一閃續き起る連發の銃聲　守卒は墻壁を踰えて出づる者あるを見出して之を狙擊したるなり、丸は皆な逸して渠の身に觸れず去れども最後の一個は渠が執り

ねたる其枝の一處を貫ぬき飛び去れり未だ二三秒間ならずして枝は中より折れて同時に此に吊るされ懸りたる乞食僧は飜然と塹の中に落下せり若し他人をして斯る高さより落下せしめなば直にソコに死せるならむ去れども渠は些しの傷をも負はず頭上に響く銃聲をばアトにしつゝ身を起して早くも闇中に見えずなれり《大叛魁》

次に一種異風の小説家を

幸田露伴

氏とす。聞く氏が一家皆耶蘇教を奉ずるに氏獨り禪學に入り。慶應義塾を出でゝより東西旅行、の間に禪味を養ひ。以て其筆に企て及ぶべからざるの異彩を加へしめたりと。文章は簡にして潔。しかも悲哀の極點喜怒の妙處に至りては。畫がゝずして言外に嫋々たる餘韻の存するを覺えしむるに至る。亦他人の得て學ぶ

能はざる處なり。かの人口に膾炙する『風流佛』の『彫像が動いたのやら、女が來たのやら、問はゞ拙なく語らば遲し、玄の又玄、摩訶不思議』の如きは一見何の意たるを解する能はざるに似たりといへども。就いて讀むこと再三再四に及べば言ふべからざるの妙味おのづから生じ來るを感せん。右の

風流佛

のほか

露團々

一口劍

など最も有名なり。

人間元より變ある者、目盲てから其昔拜んだ旭日の美しきを悟り、巴里に住んでから澤庵の味を知るよし。珠運は立鳥の跡ふりむかず一里あるいた頃不圖思ひ出し。二里あるいた

頃珠運樣と呼ぶ聲、まさしく其の人と後見れば何もなし。三里あるいた頃、もしへと袂取る樣子慥にお辰と見れば又人も居らず。四里あるき、五里六里行き、段々遠くなるに連れて迷ふ事多く、遂には其顏見たくなりて寧歸ろうかと一ト足後へ、ドッコイと一二町進む內むか〳〵と其聲聞度なつて身體の向を思いずくるりと易る途端道傍の石地藏を見て奈良よ〳〵誤つたりと一町たらずあるく向より來る夫婦連の何事か面白相よ語らひ行くに我もお辰と會話仕度なつて心なく一間許り戻りしを愚なりと悟つて半町歩めば我しらず迷に三間もどり。十足あるけバ四足戻りて果は片足進みて片足戻る程のわかしさ。自分ながら譯も分らず。名物栗の强飯賣家の牀几に腰打掛てまづ〳〵と案じ始めけるが、箒木い山の中にも胸の中にも、有無分明に定まらず此

國民の友の夏期附錄

地方の小說流行

處言文一致家に賴みたし《風流佛》

常に世人の歡心を買ふに巧なるを以て頴敏なる『國民の友』は小說流行の氣運につれて。每年夏期をトし。當時著名文學家の雄篇傑作を附錄として出だす事を、始め。又其論說に於て文學に對する意見を述べ、以て大に氣焰を吐けり。そも〳〵當時の小說界が此くの如き隆盛を來し。之をして世人着目の中心點たらしむるに至りしは畢竟小說家の力に因ること勿論なりといへども。この『國民の友』の如き彼の讀賣新聞の如き。文學に熱心ある新聞雜誌が直接に間接に此機運を養成したるは疑ふべからざる事なりとす。

獨り東京に於て此くの如き繁昌を極めたるのみならず。此風施いて遠近諸方に及び。東京に於て發兌せる小說雜誌類の地方に賣れゆくもの日は一日より多きを加へ。大坂の如きは又東京に

小説發行の團体

硯友社

摸倣して珍奇なる古人の著作を出板し。東京にても或は文人おの〳〵團体を爲して小説雜誌を發兌するものさへありき。硯友社は實に此時に於て組織せられ。其發行の雜誌を名づけて『文庫』といひ。其集會所を稱して『文壇の梁山泊』といへり。必しも百八人の文傑ありしに非ずといへども。其文學界を風靡せしむるに至りし勢には當時殆んど敵するもの無かりしが如し。彼等の多くは英書を學べり。其或者は獨乙書を學べり。從つて其著はすべて皆英獨の風を帶び好んで常に?(わらび)!(お玉杓子)……(雨垂れ)等の西洋流記號を用ひたり。而して又小説を交際社會に紹介するに此社の與かつて力ありしは人多く之を知らん。彼等の多くは交際家なり。彼等の多くい金滿家なり。少なくとも金錢に吝ならざる人なりき。故に其作るところの書は体裁概ね華美に流れ。表紙の意匠と口繪の趣向とは寧ろ本文よりも工夫を凝すの流行を爲し來れり。其文傑の主たるものを擧ぐれば。曰く紅葉山人。曰く思案外史。曰く漣山人。曰く眉山人等の數人に過ぎず。概して言へば此社の文章皆婉麗と評すれば不可なかるべし。請ふ試みに之を列記して見ん。

尾崎紅葉

氏は好んで井原西鶴の作を讀み元祿流の小説を學ばんとするものゝ如し。實に硯友社中に於て實力上文學上共に第一等の位置にあるは氏なりしが。其文常に推敲の跡を句毎に留め。讀みゆくまゝに思はず感服を呼ばしむるの妙少なからず。唯ろの言語思想往々猥褻に流れ。兎角花柳社會の事のみに偏するの傾あるは。文學に清潔を尊ぶの上に於て寧ろ憾まざるを得ざるなり。其

色懺悔

三人妻

は傑作と稱せられ。

伽羅枕
紅懷紙
紅鹿子
隣の女
初時雨

また名あり。

九月十六夜の月清みて磨きたるごとし。風爽かに渡りて今新結の鬢に吹入り、湯あがりの温肌を拭へる餘は。來過し群立の梢に鳴るなり。踏分る小徑の八重葎には、月影を宿せる露のきらきらと亂れたるが指頭に冷つき、蟲の千万聲〳〵前後に音を爭ふなど、秋節の骨髓といふ處を我一人が物にして閑行のおもしろさ。一直線に見通しの木

立一簇曇れる中に、一點星の燈火の影を我宿と眺めて、一屈曲雜木山の下なる細道を傳ひ行けば、月の位置變りて今まで見ぬ遠景色畫を展べたるごとし。酒一滴なしにこれを見免す不風雅を我と無念がるばかり、世の氣樂なる人心になりて、幽憂も犯罪も忘れ果てゝ心意清しく辿行くに、我履む下駄の音より外は爰に塵界の響なきに、後に當りて山の腹に落葉を拔足に履む音、それか！と身構へて怪しと思ふ方に瞳を定むれど物の影なし。怯心の迷ひと心を息めて二足三足行きしが、また物音するやうに聞えければ立留り、少時四邊を見廻はせど目に入るものなし。されど胸騒ぎ出して月も蟲も遠里の景色もはや目には入らずなりて、直急ぎに足を早めて曲道の角、御用！と耳を貫ぬく聲に、骨散り肉飛ぶばかりなる不意の

驚駭、衝れしごとくたじ〳〵と二三尺身を退さり、體を搆ふる間もなく、大石の轉けるがごとく凄じき地響して山より飛來る大勢、物をも言はせず前後を圍みて、眼前に鐵砲の銃口を揃へ、身動きもせば只一射にせんずる有樣なり。宗兵衛左右を轉睨はして突立てば、捕吏の一人聲高く、御用あるぞ、抵抗ふか。火遁陰形の術なくしては此中を脱るべきやうなしとや、宗兵衛覺悟したりけむ、躬ら手を回はして繩を懸けたまへといへば、二人の捕吏銃を棄てゝ取附き難なく捕縛してけり。危き器具や所持せむと懷中を調べ、袂を探るに菓子袋出ければ、捕吏輩思ひも懸けずこれは何事と呆るるに、宗兵衛は見てほろ〳〵と涙を流しぬ。この一滴に佐大夫は身を浮かすべし。《伽羅枕》

大學より出でたる一將に

石橋思案

氏あり。氏の作は純然たる西洋思想にて之を裝ふに和文体を以てす。文章の妙と結搆の奇と未だ紅葉氏に及ぶ能はずといへども。一家團欒の幸福を寫し。或は極めて緻密なる男女の情好を叙するに於て自ら一種獨得の妙あるを覺ゆ。

京鹿子

妹背貝

乙女心

等其佳什なるべし聞く氏近年腦病を患ひ專ら筆硯に從事する能いずと。惜む天此秀才をして其文藻を伸べしめざるを。

幾箇となくたち並で居る石塔を青い苔が巧に古代摸樣を

色ぞッて居ます。破れ果てむしりちらしたやうな藪垣に沿て石塔を覗いて居る卒塔婆はモハヤ老惚れたか足のふみ度もなく右往左往に倒れかゝッてゐます。何時枝を離れたとも分らない落葉はふり積ッて野犬の夜の床を敷いてゐます。かゝる荒れ果てた中に一際目立つし墓標もまだ生々しいし新佛。白張の提灯もまだ風に靡かれません。

其前に膝まづいて合掌して居る女。乱れかゝッた後れ毛を搔き上げ様とも思はず。半面を僅かに覗いた處でも何か物思にやつれ果てた可憐の小女何を思ひ出したのか。一寸顔を上げ墓標を見ては泣き。口の内で何やら云ッては泣き。合掌しては泣く。此愛らしい女は泣くより外に仕事の無い様に……更に果てしがありません。漸く經ッて泪の顔を上げました。

「アヽ……もう〳〵泣くまい〳〵……イクラ泣いたッておッか様が歸ッていらッしやる譯でもなし……こんなに妾いてはおッか様もで未練が殘ッておいでなさる處へいらッしやる事が出來ない様な物だ……アヽもう泣くまい泣くまい……

何か獨言を云ッて思はず顔を上げ墓標を見ると生憎泪の洪水が目縁の堰を突破ります《乙女心》

又硯友社の一俊才に

巖谷漣

氏あり。氏は博く獨乙學を修めしがため。其文學上にあらいした る思想圓滿にして極めて深切に。文章また之に適ひて痒き處に手の届くが如し。されば幼年小説を以て其得意と爲すもの故なきに非ず。實に無邪氣にして兒童の伴侶とするに趣味ある著作

は當時氏の右に出づるものあるまじきなり。うも〳〵幼年は又幼年相應の文學を有せざるべからず。而して人の思想を煉磨するに幼少の時代より大切なるは無し。從つて其師友たるべき文學は極めて圓滿なる思想もて包まるゝに。毅然として自ら持するの精神を以てせざるべからざるは論を待たざるべし。讀者眼を轉じて坊間流布するところの駄小説を見よ。多くは是れ淫を敎へ惰に陷るゝに非ざるはなし。此時に當り。獨り深切にも幼年子女の師友と爲つて健全幸福なる小説を著はし。以て世の善童善兒を希望ある世界に導かんとする蓮山人の志は。吾人豈雙手を擧げて之に左袒せざるを得んや。實よ此紛雜なる文壇の上に此くの如き篤志の士を得たるは。吾人の喜に堪へざるところなり。その

友禪染

こがね丸

殊に屈指の作として世に知らる。

暫時して早川は野山を見返り、《君寫眞を出して見せたまへ。》《もう破つてしまつた。》《ナニ破つた……それでは仕方が無が……あれは皆一木の惡戯だぞ。——一木、此處で野山に謝罪りたまへ！》《謝罪る樣な惡い事はせん。》《イヤ左樣は云はさん。……君は元來何の爲に野山を二葉亭へ連れて行つたか。》《只一所に酒を飲みに行つたばかりさ。》《酒を飲みにばかりならそれで可いが。……何の爲に桃吉を野山に押付けたか。》《押付るとは？》《賴まれもせん寫眞なんぞ……而も餘計な裏書までして、何の爲に野山に遣つたか。》《それは串戲さ。》《そ其の串戲が則ち友人を玩弄物にしたのぢや無いか。》《……》《今更云つたッて仕方が爲いが僕が初め

て二葉亭へ行つた頃も、君はいろ〳〵に構造説を以て、僕を誑さうとした事がある。然し僕は信じなかつたからよかつたが野山の様な正直な男を捕へて……串戯にも程がある——放蕩家の常で、自分一人遊んで居ればよいに、兎角善良の者まで誘、拐して以て自分の功勞の様に思つて居るが。君等は其の最も甚しいもので、惡魔も大惡魔だ。君の様な者があるから、今日の青年社會が段々腐敗してしまふ。君の爲に其身を誤まつた者が大學中にも幾干あるか知れない。實に吾輩が總長なら第一番に君を退學さしてしまふ。

實に君は青年社會の惡魔だ。野山が……兎に角暫時なりとも身を持ち崩して、自ら名譽を毀損したも、皆君のなした罪だ。だから今謝罪れと云つたのだが、それが解らんか。》

《友禪染》

さなきだに病疲れし上に嬰兒を產み落せし事なれば、今まで張りつめし氣の、一時に弛み出でゝ重き枕いよ〳〵上らず、明日をも知れぬ命となりしが、臨終の際に、兼てより懇意せし裏の牧場に飼いれたる、牡丹といふ牡牛をばわが枕邊に乞ひよせ苦玄き息を喘ト吻き《さて牡丹ぬし。見うなはす如き妾が容躰、迚も在命る身にしあらねば、臨終の際に只一事、阿姐に賴み置き度き件あり。妾が雄月丸ぬしはいぬる日猛虎金眸が爲に非業の最期を遂げしとは、阿姐も知り給ふ處あるが。彼時妾目前り、雄が横死を見ながらに、之を救けんともせざりしは見下げ果てたる不貞の犬よと、思ひし獸もありつらんが。元より犬の雌たる身のたとひ其身は亡ぶとも、雄が危急を救ぶべきは、云ふ迄もなき事にして、義を知る獸の本分なれば、妾とて心付かぬにはあらねど、彼時命を惜

みしは、妾が常ならぬ身なればなり。若し妾も彼處に出でて虎と爭ひたらんには、雄と共に殺されてん。さる時は誰か仇をば討つべきぞ。結句は親子三匹去て、命を捨るに異ならば、是貞に似て貞にあらず、眞の犬死とは此の事なり。斯くと心に思ひしかゞ恐び難き處を恐び、堪ね難きを漸く堪えて見在雄を殺せしが、此も偏へに胎の兒を、産み落したる其上に、て仇を討たせんと思へばなり。さるに妾不幸にして、云ひ甲斐なくも病に打ち臥し、絶に絶ねん玉の緒を、辛く繋ぎて漸くに、今此兒は産み落せしが之を養育むと叶はず、折角賴みし仇討ちも、仇になりなん口惜しさ、推量なして給はらば何卒此兒を阿姐の兒となし、阿姐が乳もて育てあげ、他れもし一匹前の雄犬となりなば、其時こゝは妾が今の此言葉をば傳へ給ひて、妾が爲には雄の仇、他が爲には父の仇なる、彼の金眸めを打ち取るやう、力に成て給はれかし。賴みと云ふい此件のみ。賴むゝ》ト云ふ聲も次第に細る冬の虫草葉の露のいと脆き、命は犬も同じことなり。《こかね丸》

此外硯友社には川上眉山、江見水蔭等の諸氏ありて共に短篇小説に妙を得たり。

余は硯友社の事を詳述せんがために叙事の秩序を越えて少しく後の時代に來れり。こゝに再び立ち歸りて篁村南翠兩氏に書き續くべき異色の小説家を紹介する事を勉めんとす。

宮崎三昧

氏は亦南翠氏流の小説家なり。其思想は西洋風の流を汲むこと多からずといへども、亦一種の体を爲せり。文章の輕妙なるは篁村氏に及ばず。趣向の宏大なるは南翠氏に及ばずといへども、人物。時。場所の配置の圓滿なる事に至つては二氏の上に出づるも

のあり。其作

桂姫

塙團右衛門

の如きは最も圓滿なるもの丶例とすべし。

智恩の夕鐘に追立られ豆腐店を立出て、酒氣沸々〳〵と迸る撥鬢の大額を、編笠に深く匿し、徐々〳〵と三條河原に來て見れば、時雨は風に拂はれて冬の月老女の面を粧ひ、川波凛烈として凄し〳〵、我呑し酒や醒ると覺ゆるにつけても梟られたる首は嘸寒からんに、片時も早く取卸してくれべき、と長き橋の上をのさり〳〵と彼方此方へ往つ戻りつ樣子を窺がへと、まだ宵なればや番の者共月夜に無用の篝火を焚て、居睡らぬ證據には高聲に語り合ひ居ける一人當千の我塙團右衛門、這奴ばら風情に心を置く

にはあらねども、人の知ぬ間に悄々地と盗みてこそ手際なれ、ドタバタ番兵を投飛して無器用なる猫が膳棚の鼠を捕るやうな眞似が面白かるべきや、今暫らく氣永に此夜を更して、と一先づこゝを立去り、東岸の小松原を上り下りに、小謠を二つ三つ、聲は鈍たれど節い細なり、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

川瀨の千鳥の聲下腹に響いて飲し酒名殘をとゞめざるに團右衛門微吟をとゞめて、大略よき時刻、徐々〳〵と鼻毛拔の途に赴むかんと、霜や置くらん、編笠の褄の萎るを拂ひて着直し、寒し〳〵、自在にあるならば今一醉、といふたところが最愛の瓢殿は腰にかぢけて最早談合敵になるべうもあし、又六殿の御住居も近き邊に御座あらず、

まゝよ〳〵、と呟やきながら三條へ立戻り、橋の袂より月光に磧を透して窺がへば、篝火も燼て番人も番小屋の内に入り故國に殘せし妻子の夢を見ると覺し、團右衞門點頭て、されば こゝ我測りしに違はざりけれ戀人嘸な御待詫、ドリヤ御見にまゐらうか、と往來人はなし、犬も吠ず、中々足音をも盗まず、磧をのさ〳〵と歩みて梟首場のほとりへ近づかんとすれば、怪しや竹柵ゑ人一人取付て乘踰んとす、悸ともせざれど團右衞門自から眼を睜り、日頃の大音に何者と云んとせしが、刹那の思慮、我も怪物なるに心づき、急に開掛たる口を閉れば、彼方も人氣に顧み見て、ちと驚ける樣子ありけり、(塙團右衞門)

大和新聞の社主にして純然たる古風小説家と稱せられしは

條野採菊

氏なり。其紙上に續載せる勸懲的の小説は大に世人に愛讀せられ。之あるがために其新聞い賣れし程なりと聞く。嘗て『新小説』にあらはれし

とりかへばや

とりかへばやは頗る評判ありしものゝ一つなり。

主人詞林は玄關より昇りながら出迎に出たる夫人浪子に向ひ詞「復羽根はべコ〳〵三味線を彈て居升ね浜「ハイと言たるのみ捗々敷は回答もせざれど詞林も玄關先なれば敢ては咎めずやがて自己が居間へ來り衣服を着替ながら詞「コレお浪些羽根に小言を被仰い、學校から歸ッても碌に復讀などゝいふ事もせず間がな透がなべコ〳〵三味線ばかり彈せて置のは世間体も宜敷ない女の子を躾るのゝ女親の義務であり升モウ三味線を止めさせて本でも御浚せな

さい浪「あなたの御國と違ッて東京では女の子はペンと歟チャンと歟言ないじやア世間交際が出來やア致しません詞「職人と歟茶屋小屋と歟の交際なら何樣三味線の巧拙を論ずる塲合がないとも言ンが、ナンノ貴顯紳士の交際なら何樣三味線が彈ませんと言ッた所で少しも耻る事はない夫と反對に婦人交際會で探題の歌を詠むと歟茶でも點るといふ時分に吾儕は一向歌の心得はございません茶も存じません活花も出來ません其替り三味線なら三下りの騷ぎ唄都々一とつちりとん、何ンでも遣り升と言た所で貴夫人は何ンと評を下すと思ひなさる太だ耻入る理由ではない歟《とりかへばや》

こゝに又

山田美妙齋

氏といへる小説界の若武者あり。夙に言文一致を主張し。言文一致會を設けて同志を糾合せり。然れども其始にあたりては世人之を輕侮し。殆んど度外ゑ置きたりしが。氏の言文一致体にて畫がき出だせる小説の一たび世に出づるや。其名聲は俄に四方に反響し。前に冷遇せられし言文一致体は漸く衆人の注目するところたらんとす。殊に氏の評判を世間に傳へしは『國民の友』の夏期附錄に掲げたる

胡蝶

と稱する。短篇小説にして。之に裸美人の畫を挾みしより大に世論の囂々を來し。作者と畫工とは一時殆んど攻擊の中心に立つに至れり。氏は又『國民の友』の紙上に於て韻文論を唱へ世人の耳目を惹かしめしが。其自ら韻文に巧なりしは。氏が初年に出だせる

寫實派の名を得

少年姿

を始として。雜誌に著作にあらはれたる諸作之を證して餘あり。氏は又佛國の小説を好み中んづくエミール、ゾラ氏の小説を學びしかば。是より寫實派（リヤリスナツグスクール）の名を得しと云ふ。殊に氏が得意とするゝ天然の景を畫がくにありて。其慘怛たる夜色の如き。凄凉たる曉色の如き。筆に從つて梟叫び露下るを覺ゆる如し。是れ或は其言文一致体の遠く通常文体に優れるところなるか。

然れども氏が寫實に傾くの弊として往々猥藝に流るゝあるは。切に吾人が氏のために文學界のために惜むところあり。其「都の花」に出だしたる

花車

この子

いちご姫

戸隱紀行

は傑作の評高かりしといへども亦此缺點を免かれざりしこそ殘念なれ。『明治文庫』を讀みたる人は必ず知らん。其壓卷第一として歡迎すべき文章は

戸隱山紀行

にある事を。請ふ左の一章を見よ。

いつか起されて見ればあわ戸隱大明神！東の嶺の端しらしらと晃めいて、朝霧の薄紗が朝日山の額を包み、風しづかに、空玉子色正に好天氣の瑞はあらはれた。朝まだ四時、既に柴田氏に訪はれた。顏を洗つたか、洗はぬかは全く夢中、單衣にくくりつけた高袴脚半と足袋とで足をしめてそして前夜用意した日和下駄を穿つた打扮は登山に似合はぬ打扮と人は轉げて笑ふばかり。生來山越は靴で無ければ下駄、其外は不得手な私、よしや黑鐵の岩角

でも踏み碎いて進まうものをと氣ばかりは半ばは拔けて山へ馳せた。　柴田氏は單衣の着流しに脚半草鞋がけ、福武氏も單衣に高袴の脚半草鞋がけ、何も身輕な打扮であつた。　金剛杖にも象る蝙蝠つきたて用意整つていざと計りに出立した。　長野町の人家まだ起きず買ひ立ての樫齒音高く響いて而も朝開の風もろとも涼しさう。往生寺山に差掛かる內爪先は次第に上つて其谷を經た頃は最早一起一伏すこしも定まらぬ峠となつた、此處を何と聞けば其處に聳ゐるのが大峯山との事であつた。この大峯山は有名な松茸山で、如何さま見上げた處松といふ木の外には土ばかり。山はざらめいた土で松には適しさう。之を右左に送り迎へての一里ばかりはまとに唯の山、是と言ふ興もなければ是といふ不興もなく、同行三人無駄口を木だまに響かせて罪もない途傍の甘艸又は釣鐘草の花をつまんでむしるばかり。果ては高笑ひに驚いて飛び立つ雲雀が二つ三つ。　顧りみれば長野にあつて見上げた朝日山やまだ今まで高いと思つた大峯山も山途の常、次第に低くなり果てて終には記標に見ゐた絕頂の松が地平線に囓まれて行く體。　夜は充分に明け離れて山の端を隈取る旭日の色もほんのり紅く、此日の天氣いよいよ頼しくなつた。《戸隱山紀行》

恍として身は紀行中の人と爲りしを覺えん。惚として心は畫幅中の人と化せしを感せん。亦多く得がたきの文なるべし。

氏は彼小説の筆を揮ひ此紀行の文を畫がくの傍ら。大を大に日本大辭典の編纂に用ひ。其功半は成れるを告ぐ。實に勉强家といふべし。氏亦近來大に劇を論じ劇を作る。その早稻田文學に『梨園

露國小説の輸入

の内秘』を寄せ。博文館より『村上義光錦旗風』を出だし、は人の知るところなり。

英獨二派の占領たりし小説界は。亦異樣の方角よりして新思想を輸入せり。何ぞや。人間社會の出來事を哲學的に觀察する露國小説の入り來りし事これのみ。中んづくトルストイ伯およびツルゲーネフ氏の小説は其模範として最初に紹介せられしが如し。蓋し

二葉亭四迷

氏は其紹介者の一人なりき。『都の花』に出でたる

浮雲

野末の菊

『國民の友』に出でたる

流轉

浮雲

等は其傑作なりとす。文章簡易にして言文一致体なりしは左の作に就きても見るべし。

「えゝ、も、ぢれッたい！勝手にするがいゝ！」

其儘、母親は奥坐舗へ還つて仕舞ッた。

これで坐舗へ還る綱も截れた。　求めて截ッて置きながら今更惜しいやうな、ぢれッたいやうな、をかしな顔をして暫く待ッてゐてみても、誰も呼びに來ても呉れない。　それに奥坐舗では想像のない者共が打揃ッて、噺すやら、笑ふやら……肝癪紛れにお勢は色鉛筆を執ッて、まだ眞新しなすうゐんとんの文典の表紙をごし〳〵擦り初めた。不運なはすうゐんとんの文典！

表紙が大方眞青になつたころ、ふと縁側に足音……耳を聳てゝ、お勢ははッと狼狽へた……手ばしこく文典を開け

て、倒しまになッてゐるとも心附かで、ぴッたり眼で喰込んだ、とんと先刻から書見してゐたやうな面相をして。

すらりと障子が開く。文典を凝視めたまゝで、お勢は少し震へた。　遠慮氣もなく、無造作に入ッて來た者は云はでと知れた昇。　華美な、輕い調子で、遁げたね、好男子が來たと思ッて。

と云はして置いて、お勢は漸く重さうな首を矯け世にも落着いた聲でさもにべなく、

あの失禮ですが、まだ明日の支度をしませんから……

《浮雲》

報知社の

原抱一庵

氏も亦露國文學の熱心家なりしと云ふ。氏の作にして世に出でたるもの多くは短篇のみ。否らずんば反譯のみ。氏が大に名を成すは蓋し他日に在るべし。

當時の文學は小説をもて之を代表せしめし事余はしば〳〵既に言へり。其作者に富み其著作に乏しからざりしは、讀み來つて讀者また遺す處なからん。余はもとより小説を以て文學を代表せしむる事を滿足するものなりとは言ハず。然れども我國敎育の根底を社會に占むること日猶淺く。實用の學問すら未だ完全の域に達する能はずして。人は日々の糊口に忙ハしきと共に。社會は又其時々の急務にのみ逐はれつゝありし當時にあつて。吾人の精神上より湧出する眞の文學は。恰も砂上に畫がける文字の如く。暫しは社會の表面に出沒するあるも。時に急潮怒濤の來るに遇へば。立どころに洗ひ去らるゝは亦免かれがたきところ。今余が小説を以て文學の全般を推すの止むを得ざる所以なり。

新舊二派

而して當時の謂はゆる文學家すなはち小說家の多くは。年なほ壯にして徒に西洋主義に心醉し新思想を入れん事をのみ勉めたるが如く。否らずんば春秋既に富み。偏に舊思想保守主義に傾ける人のみ。よく其兩時代にわたりて深く研究したりし文學家は當時に稀なりしなり。故に當時の文學家は社會の思想の幼稚なるに從ひ。一時はよく世人の耳目を聳動せしめたりといへども。社會小數の有識者をして悉く滿足せしむることは或は能はざりしならん。有識者の或者は固より文學界に是等新現象の起れるを喜ばざるに非ざりしといへども。其廣く社會一般にもてはやさるゝが故に。其少壯なる思想を以て社會を浮華輕薄に導かん事を憂ひしなり。又文學界の規律全く破れて支離滅裂に趣かん事を恐れしなり。

社會の文學家を待するや。是までは歡迎の心のみを以てせしといへども。文學界の形勢その繁昌を極むると共に。日に非なるを見出だす事亦少なからざるが故に。社會の批評眼は今や漸く開かれ來れり。或は公平に深切に作者のために批評せしも有らん。或い嫉妬心よりして同臭輩を陷れんがために之を試みたるも有らん。兎に角嚴酷なる批評は到るところに起りたり。凡そ溜り水は腐敗の速なると共に。文學の如き精神上の事業も外界の刺擊一たび絶ゆる時は。萎靡不振の狀況に陷るあるは東西古今の通則なり。當時の我文學界も此かる患に沈まんとして而して敵より朋友より有益なる批評を受くるに至る。吾人は大に文學のために賀せざるを得ざるなり。

批評といふ事起る

批評といふ事起るや。恰も國會開けて政界の魑魅魍魎が其電燈に照破せらるゝ如く。文學界の門地閥閥は打破せられたり。玉石混合せる文學界は嚴酷なる

分析を受けたり。是れ豈文學進歩の一段階として大書せざらんと欲するも得んや。

批評家出づ

批評家は常に匿名を用ふるが故に。(小説家も左様なれど)讀賣新聞以下二三の文學に熱心なる新聞紙上には。此頃より種々異様なる名目を以て數多の批評家あらはれたり。余は一々之を記さず。忍月正太夫の二氏は蓋し其最たるものなりき。

石橋忍月

氏は獨乙派文學家にして批評家を以て自任せり其批評は甚だ皮肉的にして嚴酷なる代りに公平なりとの評あり。氏は亦雪に批評家たるのみならず。其批評眼を基礎として構造せる一種不拔の文學に對する理想あることは疑なし。氏い自ら之を健全なるものと信じ。進んで之を社會に敎へん事を力めしが如く。遂に其摸範小説なる

露子姫

露子姫は世に出でたり。此書果して文學家一般を滿足せしめしや否を知らずといへども。平凡なる一般社會には餘り歡迎せられざりしと聞く。

踏み返されるのも厭はず芽を出す土筆の愛らしさ續く日和にさそはれて早咲する菫菜の仇氣なさ、見渡せば遙か土堤の梢には花も大分咲き初めたと見みて淺き霞を靉靆かせてゐる。其處は此處？　向島に程遠からぬ小村井！　かゝる樂しき境に若菜を摘みつゝ逍遙してゐるのは女連の一隊しかも十七八の淑女、振袖の姫御前、未婚者か？　無論！　美人か？　無論！　かゝる長空なる空氣の裡にかゝる綺麗な活動の愛嬌が包まれてゐる。其美しさ如何なる畫家も如何なる詩人もとても其實狀を寫し出すとは出來まい某と

言る好事家ハ慈母愛兒を懷く所を以ッて人間界の最も優美なる者だと鹿爪らしく謂ッたとか、それは妻子を持ッてゐる經驗家の眼より見たところ、妻もなく子もなき水の出花の若殿達に言はしむれば、彌生の野邊に處女の遊べる所を以つて最も優美なるものと謂ん歟、中に就て一際衆人の目に立つ淑女は先づ後より見るときはスラリと痩方な姿で襟脚長く、雪を欺く程白き細きしなやかな首がスーッと直立したる鹽梅、最早それのみで美貌の程思やられる、前に廻れば即ち卵形の顔、純白八分と微紅二分を調合した寒梅色、小イさな可愛やき口元を結んだ所に滿身を吊格が集つてゐる、然し其笑ふ時にも亦此口元の邊に滿身の愛嬌が現はれてゐる、なぜ？なぜッてアの花恥かしき朱唇の内に瓢實を並べたやうな齒が隱見するんだもの、アノ程よく豐なる双頰に鳴門を蓄へてゐるんだもの、生髪は富士額、眉は柳葉目は？言ふにや及ぶ是れこそは造化が最も意匠を凝らして仕上げたもの、試みに他物を假り來つて譬んに、恰も濁りにそまぬ蓮の浮葉の露の玉に清き月影の宿れるが如し！年頃の乙女子此淑女に逢ひ此目此口此眉此顔を見るときは思はず見とれて思はず振返る、況して男子に於ては——又況して未結婚の男子に於ては——《露子姫》。

次に

正直正太夫

氏は恐月氏に比して稍や公平を缺くの評ありしといへども、よく作者の心情を穿ち巧に裡面の觀察を施し、極めて奇警なる筆を以て手當り次第に大小小説家の作を批評せり。其あまりに觀察の裡面にわたるが故に、氏の『斬魔劍』は到るところに敵を邀へ

しが。其劍光が文學界の暗黑を破りしの功は確かに之あり。氏が亦小説作者として一種異樣の妙腕を有せしは人の知るところ。余が平凡の眼を以て見れば。氏の批評家として忍月氏に讓るだけ夫だけ小説家として寧ろ忍月氏に優れる如し。殊に其名ある作を

油地獄

とす。

油地獄

ろれに又た過日の手紙どんな容子かとお袋が氣に懸け、旁〳〵用事もあるので自身出て來たとの話振りに、金を持て來られたとが明らかに知られて、首を垂れて聽て居た貞之進は、其時冷たい汗が腕下を傳はるとゝもに稍安堵し、手紙に書たまゝの事をぽつ〳〵と句切つて繰返すを、爾か〳〵と庄右衛門は點頭ながら四邊を看廻はし、いや厚い、いや細かい、これも讀んだのかと取散らしある大字典の金字に目を留め、是れは高價な物であらうと云れたに附込んで、書籍の代に追れますと、貞之進は紙の吸口で火鉢の縁を摩つて居たが、三度の食に望みはないとだから、宿を新しく取るよりも、ぼんの二三日此家で濟めば結句勝手ぢやがと、其儘父に泊込まれて氣が氣でなく、親も大事金も大事暫し夜歩きも出來ずに居る假の神妙が、眞との念ひを倍々募らせて、今ごろは小歌は何うして居るか、濱田の御前か黑の羽織か、正可此貞之進を忘れもしまいと例に依て寐てからの枕の上にも、疑ひと打消しとが旗鼓相下らず鬪つて、明日の天氣はと問れた父の詞に、緣結びて御在ますかと答へて、最う夢か寐附の早い男ぢやと笑はれ、やつと四日間の父の逗留を三五年程にあやみくらし、これで私が雜用もと出立際にのこし

往れた金の思つたより多額なのに勇氣が出て、父を上野迄送つた其日の暮れるをも待たず、請取つただけを悉皆懷ろにして出やうとする所を、目賀田さん一寸と呼留めたは秋元の女房、直歸りますと既に下駄箱へ手を掛けたを、まあお待なさい話がありますと強て引留られて餘儀なく貞之進は呼れる方へ戻つて行つた。《油地獄》

吾人をして一見して小説なるか將た記錄なるかを疑はしむるものは。

黑岩涙香

氏の反譯なり。文章平易なるを以て評判高く。殊に新聞紙上に筆を執りて。寧ろ中等以下の智識を有する人々に廣く了解するを得せしむるは。恐らく氏の文章の右に出づるもの無からん。又氏の文章は精密なるが故に。錯雜なる英國小説を譯するには最も

探偵小説出づ

適當せるが如く。此得意の筆を尋常一樣の小説に弄せずして。奇想天外より落つる的の探偵小説に用ひたるは人の既に知るところなり。元來探偵小説は。其妙尋常の小説の如くに或は愛を寫し或は悲を寫す等人情の極微を畫がき出だすに非ずして。或事件に就き寧ろ禍福轉變の急劇なる狀態を畫がき出だすにあり。故に局面の變化極めて多く。讀むものをして或は恐れ或は驚き。一たび之を繙けば手卷を置く能はざるに至らしむ。但し固より文學上の高尚なる趣味を有するに非ざるが故に。他の優美なる小説とは同日に談ずべからずといへども。或時代には世人却つて他のものよりも之を歡迎する事あるは事實なり。氏は始め尋常小説家と群を同じうせしが。其獨得なる探偵眼ハ遂に氏を驅つて探偵小説の巨擘たらしめたり。氏の反譯にかゝるもの頗る多し。中にも

鐵假面
非小説
大金塊
死美人

の類最も名あり。

晝間より降居たる雨も日暮れに至りて風と變じ。夜の更るに從ひて益々吹荒むのみなれば忙がしき倫敦の町人も十時頃より戸を鎖し眞夜半近くに及びて。硝子窓打つ風音の哮るのみにて市街は無人の鄕に似たり獨り此暴風に恐れず薄暗き街燈の光を便りてゼラルド街を歩み行く一人は是なん當時勉强を以て聞えたる毎夕新聞の探訪者安野田露人と云ふ若紳士にして。明早朝よりの編輯に供へん爲め夜半の種を探らんとの心なるべし。安野田は風に向ひ俯

向て歩むのみなりしが忽ちに椿事の匂ひを嗅附たりと云ふ如くに顔を上げて立留り「オヤ助けて呉れと叫ふ聲が聞ゑた樣だぞ。ハテな何處だらう夫とも風の聲かな。外の探訪者は此樣な夜には種がないと云ひ家に籠ッて居るけれど此樣な時こそ却ッて珍事があるテ爾思ッて出掛て來て好い事をした」呟く聲の終らぬうち又も何れよりか「人殺し！」と呼立つ聲風に交りて飛來たる「扨こそ愈々大珍事だ。風の爲め何の家から來るか少しも見當が附かぬ。ハテな〳〵」徒らに前後左右を見廻すうち我立つ所より五十歩ばかり先手に當り軒の下に角燈の散りと見ゆるは必定此邊を受持てる巡査なるべし「ハテな巡査に此聲が聞ゑぬのかシテ見ると矢張り風かな」斯く思ひて直に角燈の方に走行かんとするに三度目に聞ゆるは確かに風に非ずして人の聲なり

「誰か來て助けて呉れー」今度は畧見當も分りたり右側か左側かは知ざれど何でも巡査と我身との間なる家の二階若くは三階より來る者にて巡査は風の上に在る故我身ほどには聞えぬなるべし。去れど巡査も三度目の聲には驚きしと見え安野田が其の方を差し行くと齊しく彼れも此方を差し奔り來り道の中程にて行合たり　巡「今叫んだのは貴方ではありますまいネ　安「何でも此邊の家の中です私しも怪んで走ッて來たのです　巡「何の家ざらう　安「何の家でせう同じ言葉の受答へ。兩個が途方に呉るゝ折しも安野田の前。巡査の背後なる二軒目の家の内より忽然と戸を突放け矢の如く飛び出る一人。宛も人を殺せし曲者の逃るが如く逸足出して風の吹く方へ走り去る。《非小説》

或は批評家の手を借り或は文學家の研究により。我國の小説は年を追ひ月を追うて精巧に趣けり。先に獨乙より歸り來れる

森鷗外

氏が同志の助を得て『新聲社』と稱する文學の一團体を起し。或は『國民の友』紙上に或は『柵草紙』の上に其文學に關する著作と意見とを公にしたりしは。亦當時の文學に對する一の刺撃にして。世人の注意を多く獨乙文學に惹きたるも此時にありき。氏の著作は慨して言へば悲慘の情を寫すに巧にして。筆鋒また極めて精緻なり。獨乙風の思想に和文体の衣を着せたるものと評して可ならん。其作は悉く纒められて

水泡集

に在り。中にも

舞姫

至極評判宜しかりき。

明治二十一年の冬い來にけり表街の人道にてこそ沙をも捲け錆をも揮へクロステル街のあたりは凸凹坎坷の處は見もめれど表てのみは一面に氷りて朝に戸を開けば飢ゑ凍ゑし雀の落ちて死にたるも哀れなり室を温め竈に火を焚きつけても壁の石に徹し衣の綿を穿つ北歐羅巴の寒さはなか〳〵に堪へがたかりエリスは二三日前の夜、舞臺にて卒倒せしとて人に扶けられて歸り來つ、それより心地惡しとて休みしが食ふごとゑ吐くを惡阻といふものならんと始めて心づきしは母なりき――嗚呼、さらぬだに覺束なきは我身の行末なるに若し眞なりせばいかにせまし

今朝は日曜なれば家ゑ在れど心は樂しからずエリズは床に臥すほどにはあらねど小さき鐵爐の畔に椅子さし寄せて言葉寡し、この時戸口に人の聲して程なく庖厨にありしエリスが母は郵便の書狀を持て來て余にわたしぬ、見れば見覺えある相澤が手なるに郵便切手は普魯西のものにて消印には伯林とあり訝かりながら披きて讀めば頓みの事にて預め知らすに由なかりしが昨夜こゝに着せられし天方大臣に跟きてわれも來たり伯の汝を見まほしとのたまふに疾く來よ、汝が名譽を恢復するも此時にあるべきぞ心のみ急かれて用事をのみいひ遣るとなり讀み畢りて茫然たる面もちを見てエリスは「故郷よりのふみなりや、惡しき便にてはよも――」彼い例の新聞社の報酬に關する書狀と思ひしならん「否、心になる掛けそ、わん身も名を知る相澤が大臣と倶にこゝに來てわれを呼ぶなり急ぐといへば今よりこそ」《舞姫》

文界の變化

新聲社の文學界に於ける。かの硯友社の如く赫々の名を成さゞりし代りに。其浮華に流るゝ事また無かりしかば。文學家一般よりは重く見られしなり。其社の作として公になりたるものは『國民の友』五十八號の夏期附錄に出でたる『おもかげ』を以て最とす。獨詩反譯の『笛の音』平家物語脫化の『鬼界島』。皆秀逸として人口に膾炙するは誰も耳にせし處ならん。

此頃二十一二年より文學界の有樣は大に變化せり。小説は下火に爲れり。是まで威名赫々たりし小説家は寂として復た聲なからんとす。然れども余は之を以て必しも小説の衰微と見做すものにあらず。寧ろ他日の準備時代として考へんとするものなり。此將に落寞たらんとする小説界に立つて稍や世人の注目を招きたるは

ちぬの浦浪六

撥鬢小説

氏の謂はゆる撥鬢小説なりき。氏は義俠浪人を寫すに巧よして文章亦よく之にかなへり。其語句の間に於て或は推敲を經ざるものゝ如き瑕瑾の往々なきに非ずといへども。一氣呵成他の能く企て及ばざるものあり。

井筒女之助

三日月

奴の小萬

鬼奴

深見笠

三日月

等今なほ世に愛讀せらるゝを見る。

夜いたく更けて星の影暗く、雨氣を含んで土手の松が枝を鳴らす風凄く、人影に吠ゆる犬の聲さへ聞へずなりぬ、折しも牛込の方より堀端傳ひに見ゆる提打の光り水に映じて

上下二つの圓火伴なふて歩むがごとく、やゝ市谷見付に近づかんとする時、あはれ提灯おちてパッと燃ゆるに閃く稲妻「何者ッ」と叫ぶ一聲「エイ、オー」と掛くる切聲續ひてバタバタと走る數人の足音傳通院の初夜つく鐘も遠音に響きて一入の慘を添へぬ

土手三番町の白須が邸へ宙を飛んで駈け戻つたる若黨一人、クゞリ門を叩く間もあらばこそ叫びながら突き入りて「曲者、御隱居の大事、市ケ谷の堀端、危い」聲聞付けて俄かに騷ぐ家内の者より、長屋の戸口蹴放ちて躍り出たる大の男、脇差提げて玄關前を斜めに走りざま「御家來衆續ひた〳〵」呼聲はあとに殘りながら、ぬしの身は早や門外に跳ね出たり

《三日月》

嗚呼一盛一衰は人生の常。今や小説界また此理に漏れずして。文學は一波毎に且つ進み且つ退かんとす。請ふ目を刮いで第三期の至るを待て。

新評戯曲十種

文法捷徑

其三　戯曲脚本

西洋文學一たび趣味を我國に傳へ。小説界の門將に開かれんとするに當つてや。書生沙翁を講ずると同時に我在學の院本また參考品として案頭に積まるゝに至れり。此に於て『新評戯曲十種』(依田學海小永井小舟等諸氏の嫩軍記忠臣講釋等を評せしもの)『文法捷徑』(那珂通高氏の忠臣講釋手習鑑曲輪日記千兩幟等を評せしもの)出で。又慶應義塾出板社の『大和文範』數十曲の淨瑠璃を活字にして出板せしもの)等の書續々と十三四年の頃を以て出つ。甲は漢文流の批評にして乙は白文を活文に組みかへたるに過ぎざれども。以て當時世人の嗜好を代表し。且つ又將來世人

の嗜好を誘導せしものたるや疑ふべからず。然れども是は單に文章として院本を見たるのみ。名文として戯曲を評せしのみ。未だ芝居といふ事の觀念は是等の書の直接に語る處ならざりしが。此頃より『歌舞伎新報』出でゝ幾分か役者と見物とを結び附け更に演劇と文學とを親密ならしめんとするものゝ如し。是れ一には院本を以て西洋文學の上位を占めしむるの刺撃に出で、二には政界の雲行やゝ定まりて天下文學を樂しまんとするの時に際したるが爲めあらざや。坪内逍遙氏の

歌舞伎新報

該撤奇談

該撤奇談

此頃に現はれたる偶然に非ざるなり。請ふ其數行を示さん。

それはそうと、予は何處まで讀さして置たるか、トいひつゝ書籍をくりひらき(舞)ヲゝこの處まで讀だりしが、トかたへの椅子を引寄せて、よりかゝりつゝ書籍をば、讀まんとあせる折しもあれ、燈火にはかに薄ぐらく、いづこともなく朦朧と、今ゝ世になき獅威羌が怨の魂か恐ろしき異形の怪物煙の如く、あらはれ出でゝ恨めしげに、椅子のほとりへ近づけば、舞婁多須パッと心付き(舞)ハテ怪しや、今まで光明かなりし、燈火の暗く成たるは○ヤゝ其處に參りしは何物なるぞフム心得難き奇怪の現象、こはこれ心の迷なるか○ヤア其方は何物なるぞ、神か人か幻か但しは惡魔の化現なるか、此舞婁多須をして覺えずも、悚熊として戰栗せしむる其方はコリヤゝイ、何物あるぞ○何物なるか返答いたせ(靈)われこうは汝の爲の惡魔なるは(舞)シテ其惡魔が何故に、此所には來りしぞ(靈)比利比の原野にて、再び汝に對面せん、ことをゞ告ん其爲に(舞)よし〳〵然らば彼の地に於て、又も汝に相逢ふべし(靈)いかにも、比利比の原野にて、對面なさんと、いひさ

して、ありしすがたハ其儘に、消へて跡なくなりにけり(舞)念には及ばぬ、比利比にて○ヤヽもはや跡なく消うせしか、今ぞ漸く我心も、我に歸れる心地して、もはや惡魔邪神と雖も共に語るを恐れざるに

演劇改良論

西洋院本の我淨瑠璃体に譯せられしは實に之を始とす。之に續いて出でたるは英王チャールスの傳を譯せる『薫東風英軍記』にてや有りけらし。譯者は戸田欽堂氏なりき。

世の嗜好既に此くの如し。今や文學家は進んで演劇改良論を唱へ。役者また熱心に其學說を聞き其新作を容れんとするの時節となりぬ。此に於て演藝矯風會起り。此會にて脚本を出だす事と爲る。其作者に撰ばれしは饗庭篁村須藤南翠の二小說家。篁村氏は之を朝日新聞に載せ。南翠氏は之を改進新聞に揭げ。以て世の喝采を博せんとせり。歌舞伎座の起れるは是等の改良熱に驅ら

演藝矯風會

れてなりき。然れども二十年頃一時ハ火の消えたる如く。矯風會も泣寐入と爲りたるが。二十二三年に至りて再ひ燃え立ち。更に演藝協會と改名して大に新作を行はんとす。此間に篁村南翠両氏ハ筆を揮ひたれども其作遂行はれずして。最後に宮崎三昧氏の手に爲れるもの僅に行はるヽを得たり。

二大作者

此時にあたり歌舞伎座局面の外に立つて盛に筆を脚本に執る大家二人あり。一は舊体を守つて名を老練に得たる

川竹默阿彌(前には新七と稱し其水と號す)

氏にして二は大平記流の評判高き

依田學海

氏なりとす。前者は實地を以て主とせしが故に。或は文學家の歡心を買ふ能はずといへども。芝居となりて舞臺にあらはるヽ時は其妙實に凡手の及ばざる處多し。其名作と稱せられしは

霜夜鐘十字辻占
戀暗鵜飼篝火

を始めとして數十種の多きに上れり。後者の作は文章的にして寧ろ小説に近く。其忠臣義士の心事を穿つに於ては。殆んど間然する處なしといへども。劇通は曰へり。役割道具立臺詞等の點に至りて未だ素人たるを免かれずと。或は然らん。是れ氏が經歴の然らしむる處なるべし。作中の有名なるものは

吉野拾遺名家譽
文覺上人勸進帳

等なり。例によりて文覺上人中の數行を示さん。

文覺上人

師長　資賢卿が横笛は。紅葉と名付けし靈笛にて。其昔し住吉大明神。強て御望みありしと云ふ。世にも稀なる名笛にて。其音も殊に麗しく。

公隆　又正賢卿の笙の音は。鳳凰の音を聞くに等しとて。鳳管と名付し名笛。殊に兩卿が秘術を盡し。調べられたる妙音は。心耳を澄す不思議の妙手。

資賢　コハ分に過ぎたる其れ詞。笛は元より重器なれど。最も未熟の調べをば。斯くお賞しに預るは。時に取ての身の面目。先づ何よりは師長公が。琵琶の秘術は人も知る。我が朝にての是れ妙手。

盛定　一年旱魃の其折に宣旨を蒙り。師長公日吉大宮の神前にて。琵琶の秘曲を盡されしより。神明感應まし〳〵て。正賢　天より神雨降りしより。万民雨の大臣と。御名を呼びしと聞き及ぶ。實に有難き秘曲の妙音。中々以て我々が及ぶ處に候はず。

資時　夫のみならず諸卿達。何れを何れと分け難き。其道々の

妙を盡されお調べありし秘曲の程。感心致して候なり。

師　未熟の業も叡感有て。今一曲と御所望あれば各々秘曲を盡されヨ。

公　委細

五人心得て候。

文　珍らしからぬ管絃かな。機嫌もなき御遊かな。

師　君前間違く來たりしは。何者なるゾ。

重　案内もなく不敵にも。御庭前へ進み寄る。正しく狂氣ゝ疑ひなし。イザ門外へ引出し呉れん。

文　イヽヤ決して狂氣にあらず。我は高雄のほとりに住む。文覺と云へる沙門貧道無縁の身たりと云へど。高雄山神護寺を修造建立なし。佛法を住持し王法を祈誓し。衆生を利益せんと云ふの大願あり。況んや大慈悲を旨とし玉ふ。十善万乘の君としてなどか容易く御奉加は。聞し召し入れられざるへき。今謹んで大願の趣意。叡聞に達すべし。各々夫にて聽聞あれ

此紛亂の時に乘じて赤手遂に歌舞伎座を乘つ取りしは。昔日新聞界の大將軍と聞ゐし

福地櫻痴（源一郎氏の號）

居士これなり。其趣向の大なる事ゝ或は學海翁に讓る處なきに非ずといへども。居士が眞の劇通たり院本作者たるの點よりしていへば。十分黑人的のものたるは世人の一般に許すところなり。其最も名あるものを

春日局

平野次郎

關原譽凱歌

日蓮記

等なりとす。左の『平野次郎』數行を翫味せば思半に過ぎん。

長澤番人ども西側其外を見廻るであらう

番人畏つて御座ります（ト番人は金棒を引き長澤の先に立ちて西側の方へゆく是より竹本太夫が床の淨瑠璃になつて）

平野次郎

淨「痛ましや平野次郎國臣は憂とまさる升木屋のひとやの内に囚れて心はすむや須磨琴に思ひを述る一節の節も唄歌も哀れなり」

（ト此淨瑠璃の切にて牢内にて一弦琴を彈て左の唱歌を唄ふ）

唄「ひとやの内の日長さは千とせの秋の心地せり。此い殊なる神の代か更に命も延びぬへし。素より獄舎に住む身は詫しと云ふも愚かなり。悲しと云ふも餘あり。樂しと云ふて止まじ」（ト唄ひ畢りて）

平野　ハッ我ながら女々しき述懷、どれ心を澄して尊攘の手段の工夫いたさうか

淨「丈夫の魂ひどつかと座し。思ひを凝し居たりける。」無暫やな國臣が妻の妹おひさ女は。姉が形見の雄吉を背に負ひつゝ唯一人忍び寄るこゝろ健氣なれ」

お久　今聞えし一節は兄上の御聲、ムゝ扨は彼所が……其であるよナア、ハテ何して御知せ申さうか、オゝ夫よ、思ひを述ぶる子守唄（ト雄吉をゆすぶりながら）

唄「坊やはよい子じや、お泣きやるなア。坊やの御つかちやんいゝどこへ往たア。お父さんの身の上、苦にやんでエ。返らぬ旅に、お立ちやつたア。坊やのおとちやんは、

どこへ居る、大かた知らずに、居やらうぞ。」
（ト唄ひながら牢の邊に忍び寄れば、平野は吳器口より顔を出して
平野　ハテナ今唄ひしは聞覺えある聲なるが　（ト見廻せば、
お久　お久は平野を見て
兄さま

櫻痴居士に繼いで起つ青年才士は抑も誰ぞ。山田美妙齋氏亦近來脚本を著はすに志ありと聞く。

其四　新体詩唱歌

小説と共に勃興し來りしもの猶あり。曰く詩歌の改良論とす。其論と爲つて發せしものゝ洋學者より國學者より。種々の論據を以て種々の目的を以て一時に湧き立ちしといへども。或は模範と爲り或は參考と爲りて新体作例の先鞭を着けたるものは、之を二途よりすと謂はざるべからず。其一は歐米大家の詩歌を反譯し。若くは是等より得來りたる趣味を反響せしめしものにて外山正一（丶山仙士と號す）矢田部良吉（尙今居士と號す）井上哲次郎（巽軒居士と號す）諸氏の『新体詩抄』（十五年發刊）に於て技倆をあらはしたるもの之に屬し。其二は西洋唱歌を小學校幼稚園に用ふるにあたり。樂譜に合はせつゝ新作もしくゝ反譯せし歌曲にして。文部省音樂取調掛にて公にせられし『小學唱歌集』（十四年發刊）之に屬す。概言すれば前者は謂はゆるポエムを起さんとするものにて用語は通俗平易を主とし。後者は謂はゆるソングの手本にして語氣往々古調死格に傾けり。是れ其大なる差別なり。『新体詩抄』に曰く。

一里半なり一里半　並びて進む一里半

死地に乘り入る六百騎　將は掛れの命下す
士卒たる身の身を以て　譯を糾すは分ならず
答をなすも分ならず　これ命これに從ひて
死ぬるの外はあらざらん　死地に乘り入る六百騎

《外山氏譯》

昔の人の是といひし　事も今では非とぞなる
今日の眞はあすの僞　あすの教はあさつての
非理邪道とやなるならん　天地萬物一定の
規律に由りて進化すと　學者は謂へど是を之れ
聢と心に認めたる　人は果してなかるらん

《矢田部氏作》

爭ひ多き世の中に　此身を寄せて先鞭に
なりてます〳〵進むべし　言なき啞となる勿れ

牽かるゝ牛となる勿れ

《井上氏作》

『小學唱歌集』に曰く。

うつくしき。わが子やいづこ。うつくしき。わがかみの子は。弓とりて。君のみさきに。いさみたちて。別れゆきにけり。

又曰く。

かきながせる。筆のあやに。そめしむらさき。世々あせず。ゆかりの色。ことばの花。たぐひもあらじ。そのいさを。

以て氷炭其趣を異にせるを知るべし。然れども物の左に曲れるを矯めんとすれば。先づ之を右に傾けざるべからず。新体詩派の是より續出して通俗的の詩歌を興せるは。外山以下諸氏の功多きに居ると謂はざるべからず。而して優美流調以て吟ずべく以て歌ふべきものたらしめしは。唱歌集の獨り拍子を取りしに

由らずんバあらざるなり。

此頃より小説は漸く盛に爲れり。小説家は日に月に數を增し來れり。從つて新体詩を作り新唱歌を詠ずるの聲。亦小説界中に響き出でたり。

山田美妙齋

氏の『少女裁縫の歌』

霜　さえて　雕　とはく　飛ぶ。
大　の　こゑ　川　を　も　わたる。
いざや　冬、むし　も　機
織りはて丶　しづか　に　ねふる。
春　の　きぬ　われ　も　縫ひ　てん。
添乳　する　母　を　たより　に
ほのぐらき　光り　に　たゞる。

進め、針、あだ　に　な　折れそ。
身　を　つくし、着ぞめ　の　時　の
えりぞめ　に　なれ　よ、あゝ　針！

また

嵯峨の屋おむろ

氏の西詩反譯中

岩うち流すテレク川
惡徒のチエチエンが岸を匍ひ
お腰の劍といで居る
けれども其方の父様は
手だれの武夫軍人
お眠やれ可愛子うと〳〵と
ねんねんようおころりよう

などの作以て其一班を推すに足るべし。

宮崎湖處子

氏といふ人あり。英國の詩宗ウォーズウォースの詩篇を愛讀して屢〻之を反譯せり。『少年園』に載せたる

兄弟ありや、汝達は
いくたりなりや、童女と、
問へば『皆にて七人』と
いぶかしげにぞ我を見し。
『いづこにありや我に告げよ、』

と云へば『我等七人の二人は都に家を持ち
二人は海に浮びたり。

の如き其一なり。亦豈英詩の思想を傳播せしむるに於て力なしと謂はんや。

白菊の歌和歌改良論

是より先き落合直文氏は『白菊の歌』を著はし。萩野由之氏は『和歌改良論』を著はし。以て舊体を脱し新思想に入らんとするの傾向國文家中にも萌し初めたりしかば。かの洋學家中の熱心者と遙に相聲援しつゝ長篇詩歌の進歩を謀るものゝ如し。建樹不肖にして諸氏の驥尾にも附く能はずといへども。亦此間にあたりて新体詩唱歌の拙作を屢ば公にせし事ありしは。讀者或は知るもあらん。十九年に『書生唱歌』を出だし。二十年には『詩人の春』を出だし。二十一年には『いさり火』を出だし。又此年より年々に『明治唱歌』を出だしたり。

拙作の新体詩

國文家の新唱歌

人氣の向ふところ世運の趣くところ。謂はゆる新体詩なるものと學校用唱歌と隆盛に到れり。國文家よりは高崎正風福羽美靜黑川眞頼本居豐頴佐藤誠實中村秋香落合直文小中村義象關根

正直平田盛胤等の諸氏出でゝ其作に從事し。旗野櫻坪氏は『無韻非歌論』を主張し。山田美妙齋氏亦熱心に韻文論を唱へしかば。洋學家また頻に之を作り試むるもの多きに至りぬ。然れども之を他の小說に比して其發達を論ずる時は。未だ幼稚にして殆んど繈褓の中に在るを免かれざらんとす。嗚呼其眞の發達と隆盛とを見るの望は第三期に屬せざるを得ざるなり。

小說雜誌

其五　雜誌及著書

新体詩といひ脚本といひ。多少小說に動かされて起り。幾分か小說家の手を借りて生長せしは讀者既に知れり。小說が文學の代表者として爛々たる光彩を當時に放ちたるより生じ來りし影響は啻これのみならず。雜誌に著述に種々の點に於てあらはれたり。かの『都の花』『新小說』『やまと錦』『あしわけ舟』『文庫』『我樂多文庫』『江戸紫』『新作十二番』『新著百種』『小說群芳』等の如き小說に關する刊行物が。雨後の茸のやうに續々世に出でしは固より其主たるものなりといへども。概ね唯だ文學上の製產物を示すに止まりて。之を研究する事に深く意を留めたるものは未だあらざりき。此時にあたり從來の政事雜誌にして文學の爲めに力を盡したるものあり。又新に文學研究の爲めに設けられたる雜誌あり。『國民の友』は其前者に屬し。『柵草紙』は其後者に屬す。元來『國民の友』は趣味多き雜誌にして機を見る事早く。時好に投ずること頗る巧なりしが。今や文學の一變すべき氣運を豫知して。其ために一擘の力を盡し以て世人を進路に導くの一燈光たらしめしは。兎に角民友社の功多しと謂いざるを得ず。其夏期附錄い殊に當代名家の作を集めたるものなるが故に。極めて廣く愛讀せられ。今猶せられつゝあり。『柵草紙』は鷗外氏の下に述べたる如く。

國民の友

柵草紙

國文學の勃興

獨乙文學を主として歐洲文學の思想を我國に紹介する事を勉め。又和文の研究に力を致したるは忘れてならぬ事あり。其他『學藝志林』『東洋學藝雜誌』(現今い科學の一方に傾きたれど)『出板月評』『文』『學』もしくは女學に關する『女學雜誌』『いらつめ』『貴女の友』等は前後に出でゝ多少新文學を奬勵するの媒介を爲したりき。

終に臨んで一言せざるべからざるは國文學(寧ろ古文學と稱するを適當なりとするにもせよ)の勃興したりし事是なり。蓋し先に『かなのくわい』起りて漢文熱を冷却せしめしことゝ。文部省令出でゝ公私諸學校に國語科を置きたることゝ。與かつて其大誘因を爲したるは疑ふべからず。此時にあたり大に全力を盡して之を興起せしめ。之を隆盛ならしめ。之を普及せしめたるは嘗て大學總理加藤弘之氏の時に置かれし古典講習科出身の人々を以て其最ありとすと謂はざる可からず。見よ彼の

小中村義象
落合直文
萩野由之
佐々木信綱

諸氏の校註編著せし

日本文學全書
日本文典
新撰歌典
歷史讀本
日本歌學全書
歌の栞

等が如何に文學界を利益せしめしかを。

文法書

是より先き日本文法書の著者としては

中根淑

物集高見

チャムバーレーン

辞書

諸氏あり。余も亦小中村落合兩氏の日本文典出づるに少し後れて『和文典』を著はし試みたり。これのみならず辞書には

物集高見

近藤眞琴

大槻文彦

諸氏の

ことばのはやし

ことばのうの

言海

文學史

等ありて前後世に出で。文學史には

高津鍬三郎

三上參次

兩氏の(落合直文氏補助)

日本文學史

歴史

あらはれ。歴史にハ

物集高見

田口卯吉

島田三郎

内藤耻叟

氏等の

日本文明史略

日本開化小史

開國始末

安政紀事

および修史局の

國史眼

出でゝ史料研究の方法を一變せしが如き。亦以て榮華日に高き

哲學上の著書

るの小説界と相呼應しつゝ文學の隆盛を告ぐるを見るに足る。

唯他の哲學上の著書に至つては。蓋し準備中の時代に屬し。二三

の小著述は無きに非ずといへども。眞の製産を得んことは到底

第三期以後に在るべきを信ずるなり。

隨筆

國文學の勃興すると共に。亦一の影響を史學上に及ぼしたるは

考證學の流行なり。從つて隨筆書類は日に愛讀者を增し。其出板

せらるゝもの亦少なからざりしが。最たるものは金港堂の『百萬

塔』吉川書店の『百家説林』博文館の『温知叢書』ありとす。

其六　結論

概して言へば。第二期の文學は小説を以て代表せられたり。言ひ

換ふれば外面を飾るところの浮華なる文學を以て蹂躙せられ

たり。故に眞の文學に至りては深く社會の裡面に潜み。世人の注

目を惹く事なくして時の來るを待つありしも亦止むを得ざる

なり。小説界の繁昌此くの如しといへども。是亦觀來れば同じ背

丈の人々に富みたるのみにて。之に覇たるの月桂冠を有する英

雄はと問はゞ。恐らくは答に窮するを覺えん。既に覇權の歸する

處なし。從つて統一を缺くは固より其ところ。既に統一を缺けり。

其結果として盛衰を一時の流行と共にし。確かなる歩みを徐々

として進むる能はざるも何ぞ怪むに足らん。さはいへ是亦小説

界を吾人が希望するところの理想に達せしむる一段階にして。

一たびは必ず經ざるべからざるの時代なりとすれば。決して等閑に冷淡に看過すべからざるなり。

第二期の文學は實に綠長短なき春の野邊なりき。平原一面の若草なりき。故に百花爛熳の日に至りては。其生長また雪間に發見せし日と同比例を保つべからず。遂に俄然尺に達し蕾を見するの盛運に向へるは亦勢の然らしむる處なり。而して其勢を然らしめたるは。余が前に述べたる政事および社會の問題と。文學との關係その重きに居るものとす。要するに小說は此期の終より して其性質ょ漸く變化を生じ。柔弱猥褻なりし文体は雄健なるものと爲り。不健全なる思想の著述は從つて世人に嫌はれんとするに至りぬ。嗚呼時なるかな。今此時に乘じ。小說のみをして專ら文學を代表せしむる能はざるに至れるを喜ぶと共に。余は切に望む。第三期以後に於て眞の文學漸く社會の表面に顯はれ。釣合よき步調を以て進み行くの徵候を認めん事を。

(四)第三期　謂はゆる新聞時代

概論

我國維新後に於ける文學の變遷は。之を概言すれば只一直線をたどり來りて殆んど見るべきの段階なし。蓋し文學上の製產物の以て文學界に時代を作るものなきに因ると謂うて不可なからん。余が大体に於て三時期を分ちたる所以のものは。理論上より言ふ時い寧ろ文學うれ自身の時期には非ずして。文學が外圍事物の刺擊を受けたるに因り。多少の異色を呈したるを見て分ちたるに過ぎず。亦以て其根底の弱きを證明し。外界の波瀾に逆らつて其確乎たる基礎を維持するの力なき事を見るべし。そも〳〵余は文學と呼ぶところのものをして。もとより或一派の人

の如く。小說のみの獨占名稱たらしむるを甘んずるものに非ず
といへども。さりとて一般學者が含ましむる處の詩歌戲曲歷史
哲學其他を悉く指すにも非ず。何となれば。余が目的は明治年間
に於て特に發達したる文學の沿革を述べんとするに止まりて。
未だ我國の物として同化せられざる直譯的の文學と。既に前代
もしくは前々代に於て生活を止めたりし古文學の遺骸とに至
つては。甚だ之を重く見ること能はざればなり。此見解を以てす
る時は。余をして小說が明治文學の骨髓たりと言はしむる事の
甚しく不當ならざるを知らん。第二期に於て余が最も力を小說
に盡したるは即ち之が爲めのみ。
然るに世人の小說を待遇するや終始甚だ不深切にして。其始め
て萠芽し來るや殆んど度外視せし有樣なりき。而して圖らずも
俄然其勢力を得來るに及んでや。定見なき世人は直に拍手喝采

して之を歡迎せること可笑しけれ。然れども其歡迎は一時の熱
に浮かされしに過ぎざりしかば。名譽と奢侈との巢窟たる政事
界の出來事が世人の心を誘ふに當つては。冷淡にも歡迎したる
賓客を見捨てたり。一たび見捨てられたる文學すなはち小說は。
再び昔日の光榮を恢復する能はずして地に落ちたるまゝ第三
期を迎ふるに至りしなり。然れども余は獨り世人のみを責むる
ものには非ず。外界の毀譽褒貶によつて其方針を左右にする小
說家が。如何に明治文學の消長に關係したるかは。今更言はずと
もの事ならん。
顧ふに第二期の前半は文學生長の時代にして其後半は壽命短
き文學の實を結びたる時代なりき。余は明らかに第二期の終と
第三期の始を限界する能はずといへども。大略を言へば政事上
の一大事件たる憲法發布の時を去る二三年の間に。文學は世人

新聞紙

の愛顧を失ひしなり。其頃よりして如何に小說の出づる數を減じ。世人が之を歡待する情の冷却せしかは。誰も確かに認むる處ならん。是亦其故なきに非ず。漸く政事上諸般の問題が目下焦眉の急と爲り來るにあたつては。寧ろ贅澤物の傾ある浮華文學は。政事上實用のものに其位置を讓らざるを得ざればなり。

政事上實用のものとは何ぞや。新聞紙すなはち是なり。新聞紙は社會一般に大なる關係を有すると共に。自ら文學界に其位置を占めて。然も其間に勢力を恣にするは疑なし。されば政事上の多忙は文學上の新聞紙をして其腕を伸べしむるの機會を得せしめたるや亦疑ふべからず。政事界既に繁忙を極め。社會上の問題を解釋するが爲めに。新聞紙の主義議論が一般世人の心を左右したると共に。文學は獨り此新聞によつてのみ其存在を社會にあらはさんとするに至りしは。文學の衰微のために哀しまざるを得ずといへども。一方には未來に於て。爲めに文學が如何なる變化を受くべきかを。吾人をして豫察せしむるものなり。嗚呼其根底未だ固からざる我國の文學は。嘗て小說によつて代表せられ。今また新聞紙によつて其勢力を維持せんとす。何ぞ危きこと累卵も啻ならざるや。余は世の文學博士。文學學校の敎員講師。著儒碩學の人達が如何に社會の裡面よりして文學のために盡す處ありしかは。特に言はず。唯社會の表面にあらはるゝ處の。國民一般の見て以て文學と爲すものに至つては。前述の斷定を爲すの止むを得ざるを知るなり。

第三期は憲法發布後兩三年に始まり引いて現今に亘る。呼んで新聞雜誌時代と爲すを憚らざるなり。およそ文學に對する世人の眼光が批評的に向へる事は第二期に述べたり。而して最も自由に批評を爲すものゝ新聞雜誌に如くものなし。是れ新聞紙の

文學上に益する處殊に多き所以にして。亦前期文學の成果に對して批評を試むる

早稻田文學

哲學雜誌

雜誌

等の廣く世に愛讀せらるゝ所以なり。新聞紙は必ず現在に伴ふものなるが故に。第三期は未だ文學上の製作物を富まさゞると共に。從つて批評の筆また閑なるを見るといへども。其狹き意味の文學に對して寧ろ冷淡なると同時に。廣き意味の文學を代表する新聞紙としては。當期に於て著るしき發達を爲したること。余も既に言ひ讀者亦明かに知る處なり。請ふ少しく新聞紙に就いて論せん。

本年八月の調査によれば。全國の新聞紙およそ百九十種。其体裁主義に於ておの〳〵特色ありといへども。要するに猶發達の時代に在りて。吾人が理想する處のものは一も之なきが如し。諺に曰はずや多忙は多望なりと。政事界の近年に於ける出來事の多きこと。實に新聞紙を驅つて多忙界中に入らしめたり。今や新聞紙は亦前日の如く無智なる世人を相手取るものに非ざるが故に。其論說が重き責任を負へると共に深く其研究を要し。探訪通信の迅速を要し。從つて其正確を期せざるべからず。而して世人は四方より八方より眼を刮いで新聞紙を環視しつゝあるが故に。其責任の重きを加ふる一方には日に月に多希多望なる位置に立たんとす。地方の新聞紙は暫く措き。現今東京大坂に於ける新聞紙にして廣く讀まるゝものを擧ぐれば。『東京日々』『報知』『時事』『毎日』『日本』『國民』『新朝野』『讀賣』『中央』『國會』『二六』『自由』『東京朝日』『やまと』『開花』『萬朝報』『めざまし』『大坂朝日』『新浪華』等にして。世人が新聞紙を利用するの多きを加ふると共に。其

東京大坂の新聞

四大新聞

發兌高の增すこと驚くべきの額に達せり。中んづく其記者に健筆の人あるが爲めに著るしき特色を示したるもの四あり。曰く『東京日々』『日本』『國民』『時事』これなり。東京日々新聞は。世人が見て以て半官報と爲す處のものにして。

朝比奈知泉

氏筆を執り。主義に於ては殆んど滿天下の新聞紙と反對の位置に在るが故に。筆鋒頗る鋭利を極む。其文は漢文体に西洋文体を加へたる論說を見る事多し。日本い過激なる國家主義を執れる新聞紙にして。

陸實

氏主筆たり。文体は漢文書き流しに詩人的風味を加へたるものと評すべく。悲歌慷慨の情日々の紙上に溢れたり。國民新聞い主義に於ては日本新聞と正反体の位置に在り。執る處は平民主義にして其主筆たる

德富猪一郎

氏が耶蘇敎に對する信仰と。英國風の家族生活を好む事とに原因して。紙上には圓滿なる趣味を備へたり。論說は純粹の西洋風にして(マコーレーの文体とも評せんか)言ひ廻しに巧なるは讀者も知らん。以上三新聞と全く趣を異にせるものは時事新報なり。其社主が

福澤諭吉

氏にして其社員の多くが慶應義塾出身の人たる事と。余が第一期に述べたる福澤氏の學風とを對照し來る時い。此新聞紙が如何なる特色を有せるか。問はずして明かならん。其文平易淡泊にして趣味ゑ乏しく。十の八九實利主義に傾ける事は言ふまでもなき事あり。

今や新聞雜誌が文學上に勢力を有すると共に、雜誌社もしくハ新聞社より他の方便を以て文學のために盡したる功力は、此に特書せざる可からざるものあり。民友社が

十二文豪

を出だして歐洲著名の文學家を紹介し、博文館が

明治文庫

を出だして小說の餘喘を此時代に維持し、經濟雜誌社が

史海

を出だして史學の研究を奬勵し、朝野新聞が

千代田城大奥

を載せ、讀賣新聞が

大奥の女中

を掲げて德川時代の史料を與へたるが如き是なり。

終に臨んで、第二期に遺したりし西洋學の變遷をも聊か此に併せ述べざるべからず。始め我國に於て發達の速かりしは英學なる事既に言へり。然れども今や政事學法律學もしくは史學の研究漸く隆盛なるに從つて、獨乙學は起り來れり。殊に本年高等中學の制を改めて、或一部に於ては獨佛學を主眼とせしが如き、事甚だ小なるに似たれども、獨乙學の勃興には與かつて力あるものたるは疑なし、其他露西亞語の如き伊太利語西斑牙語の如き之を學ぶもの甚だ多からずといへども、幾分づゝか開けゆくの今日にあたり、最早英學のみを以て昔日の如く洋學と呼ぶの甚だ廣きに過ぐるの感あるに至れり。

一たび西洋學の我社會に入るや英學は下よりし獨乙學は上よりせし事、亦既に述べたり。故に英學の行はるゝ區域は甚だ廣くして、現在にも未來にも猶ます〳〵進歩を早めんとす。啻に其學

の古く入り來りしが爲めのみならず。商業に工業に英國は其主動者として世界に立つの原因よりしても必ず榮えて衰ふまじきを豫知するなり。況んや其萬國一般の貿易用語たるに於てをや。獨乙學に至つては四つの方面よりして後來大に著るしき發達を見るあらんとす。其四つとは何ぞ。曰く政事法律。曰く軍事。曰く醫學。曰く美文學。これのみ。中んづく政事法律學の研究に於て。獨乙が獨り世界中に一生面を開きたるは人の知るところ。今や我國の政事界は日に繁忙に趣き。加ふるに法典編纂の事あり。日清間事件の結果よりして國際公法其他政事上の關係極めて多からんとす。されば獨乙學の隆盛を目前に見るは讀者も期して待つ處ならん。

新聞紙の將來

今此に余が諸君と紙上に別るゝにあたり。第三期を代表せる新聞紙の未來に於ける希望を述べて。以て筆を收めんとす。そもそも我新聞紙の過去に在つては。是こそ東洋一獨立國の新聞紙なりとして世に示すべきもの無かりしを悲しむなり。實に其資本に乏しきと事業の經驗に薄きとに基きて。肝腎ある我東洋の形勢をも遠き西洋の新聞紙より轉載するを常例とし。其發達といふも範圍極めて狹かりしを嘆くなり。然るに近年よ至り。政界頗る繁忙なると共に其論說は深く研究を加へ來り。殊に日清間の關係一たび破れて。謂はゆる東洋のバルカン半島(朝鮮)は其獨立を我義俠心に任すに至り。歐洲强國をして之を世界の權力平均を破るものと見るの猜疑心を生せしめしより。我日本帝國の新聞記者は自ら進んで東洋の形勢を探知せざるべからざるの位置に立てり。此に於て從來依つて以て確報の根據としたる西洋諸新聞の賴むに足らざるを覺破せしが故に。今日以後に於ては新聞紙は新聞紙としての覺悟を以て。將來に斷乎たる方針を執

らざるべからざるの決心を爲すに至りしは。日々の紙上に注がれたる各社記者の熱血以て之を證すべきなり。探訪に論說に其世間を觀察し又世間に忠告するに於て極めて重き責任は。日に其頭上に加はり來らんとす。東洋の天地平定するの時にあたり。以て我大日本帝國を代表せしむるに足るべき一大新聞の出で來らん事。啻に余が文學界のために期して待つのみならんや。抑も我大日本帝國のために吾人國民の希望に堪へざる處なり。

明治文學史　終

明治廿六年十二月廿五日內務省許可
明治廿七年十月廿六日印刷發行

定價金拾貳錢

編輯兼發行者　大橋新太郎　日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　野村宗十郎　京橋區築地一丁目二十番地
印刷所　株式會社東京築地活版製造所　京橋區築地二丁目十七番地

東京日本橋區本町三丁目
發兌元　博文館

版權所有

國民文庫總目次

歐米名家詩集

全三冊
正價拾二錢
一冊郵税四錢

美酒ありと雖ども飲まざれば其味を知る能はず、名詩ありと雖ども讀まざれば如何でか其妙趣を窺ふを得べき、歐米諸國に詩歌の大家多し、今其名作を未だ讀まざる諸君に紹介せんが爲め、邦語の詩篇に翻譯せられしは大和田先生なり、先生が新躰詩に切なるは世人の知るところ諸君一度此書を繙かば、美人泣き、勇士呼び、天地歌ひ、萬物躍るの聲、かの金玉の原作と相和し、相唱へて、鏘然紙上に響來るを覺ゆべし、

文學遊戯

全一冊
正價拾二錢
郵税四錢

既に文學といふ八釜しそうなる文字なり既に遊戯といふ面白そうなる文字なり此八釜しそうな文字と面白そうな文字と相容れざる事水火氷炭も啻ならざる者を一行に書下して文學遊戯と題す題既に奇なりといふへし奇か偏か八釜主義か面白手段か卷を開きて其奥を探らずんは知るべからず市に賣る者に各々看板あり曰く蕎麥曰く鮓飯曰く酒曰く餅、是等は一見して其品物を詳にするを得れども淺草奥山の曲馬玉乘山雀の藝に至りて一枚の看板豈悉く其眞趣向を說明し盡すを得んや文學遊戯も外から見ねば處か玉なるべし白雲深處金龍躍春も奥なる三吉野の山これは〳〵と驚かるべき國民文庫第四編は春風に吹かれつゝ愛讀諸君を茲に待たんとす

新躰日本歷史

全二冊
正價拾二錢
一冊郵税四錢

面白く書かんとすれば大冊に過ぎ。小冊に纒めんとすれば簡易に偏して要領をも盡さゞるハ。歷史編纂の通弊なり。且つ歷史には漢文直譯流あり和文擬古躰あり或ハ翻譯躰丸出したるものあり。何れも惡しきにハあられど。歷史を學ぶと同時に文章を兼修をると云ふ便利とよりいへば不完全なる感ありとは。大和田先生が持論なり。此書小冊子にして簡易なるは紙數の少なきと價の廉なるとにて之を知らん。其躰裁の新躰にして趣向の面白きと。其行文の和漢折衷躰にして優美流暢なるとハ先生が持論と平生の筆力とを以て之を知らん以て獨習用にも供すべし以て教科書にも爲し得べし

新躰萬國歷史

全二冊
正價拾二錢
一冊郵税四錢

曰く行文流麗にして快活。曰く事。簡潔にして具備。之を此書の一讀興味を感せしめ再讀卷を棄つるに忍ばざらしむる所以とす。世に萬國歷史多し。然れども未だ曾て和文大家の手に成りたるものあらず。此書の一種特殊の妙味ある言ハずして知るべきのみ

英米文人傳

全一冊
正價拾二錢
郵税四錢

傑として花の如きあり琅として玉の如きあり或ハ清風徐ろに來て水波起らんとする如きあり或は狂雲時に捲て電光地を走る如きあり人一たび此書を取つて讀まゞ英米幾多の詩人文人來つて友と爲るべく坐して其境遇の喜憂悲樂を語るべし世に文學者の傳を載するの書多しと雖も未だ遠く之を歐米に探つて文明の要素を講究するの材料たらしむものあらず先生が此著豈一夜燈下の幽鬱を慰むるのみに止まらんや建武里の月、庭舞洲の雨、或ハ情生を起たしむるもあらん武夫を泣かしむるもあらん

明治文學史

全一冊
正價拾貳錢
郵税四錢

王政維新以來百事開明の進運に向ふと此に廿七年。其間に著大の發達を爲しつゝある文學界の現象豈記すべきもの少しとせんや。一たびは翻譯書の流行となり。二たびは新聞紙の擴張と爲り。三たびは小說の隆盛と爲り。四たびは和漢文學の再燃と爲り。五たびは韻文論平民文學の勃興と爲る。實に筆研家多事の秋なり。讀者若し閑窓の下に此書を繙かば居ながら明治文學のパノラマに對するの感あらん。

新文林

全二冊
正價拾二錢
一冊郵税四錢

大和田先生の理想を示す處の新體文林は生れ來れり和漢洋を折衷し雅俗古今を調合せるの新體文林は顯はれ出でたり遊記あり紀行あり諷刺あり諧謔あり論あり說あり傳あり序あり優美婉麗吉野の春を寫すもあれば凄慘寂寞日光の秋を畫がくもありて間々挾むに新色滴るの長短歌篇を以てす、一部を購うて閑窓の下に繙きつゝ茶を呼ぶも好からん汽車に汽船に携へつゝ旅行の友と爲すも可ならん

國民文庫全部拾二卷洋裝美本**正價**(一冊二百頁以上)拾二錢○六冊前金六拾七錢○全部十二冊前金一圓廿五錢○郵便税一冊四錢ヅゝ
廿七年一月ヨリ全年十二月迄全部完成ス

澁江　保君著

希臘羅馬文學史

全一冊洋裝
正價拾二錢
郵稅四　錢

希臘の山秀て水清き所嘗て歐洲文明の源泉なり羅馬の城高く刀閃く所曾て宇内壯觀の吹鼓たり苟くも第十九世紀文明の大綱を探り其濫觴を廣め近代文明國の故園に逍遙せんと欲するものは先つ希臘羅馬の文學を知らざるべからず本書希臘文學史を說きては上古、雅典衰世の文學を述べては詳說し其文學の偉觀壯麗を叙し、羅馬文學史に悲歌樂詩短長文學の第三期に分ち其豪宕雄活を論す時に悲歌發し歌の眞粹あり時に悲笳秋風を歌ふの衰世文學となり戲曲となりて王政時代の文學となり遙むて其發達となり散文となり哲理文學となり帝政時代の修辭學小說となる其文學の變遷により其隱微により社會の事情を解剖し捉躍し來らば其快味豈に文學上の趣味のみならむ正に希臘羅馬文明の急流に棹し左顧右盼兩峯の風色應接するに遑あらざるへし

澁江　保君著

英佛文學史

全一冊洋裝
正價拾二錢
郵稅四　錢

本書は獨逸佛蘭西兩國上古より現時に至る迄の文學の沿革を明かにし有名なる詩文戲曲家小說家史家哲學家論文家等の傳記持說及び其著書の性質大意等は勿論殊に諸の有名なる戲曲小說の筋書に至る迄詳細に叙述したるを以て一たび卷を繙かば兩國古今の文學を味ふを得へし

澁江　保君著

英國文學史

全一冊洋裝
正價拾二錢
郵稅四　錢

漢文學は早く文學者の巨眼に入れり其痛麗沈壯能く國民の性情を表す英國の文學は既に一千五百餘年前に發し索遜文學より更に發達してエリサベス文學隆盛の原因となり萬國無雙の戲曲家シエクスピヤを生し散文記者の巨擘ベーコン卿を生し或は古文學時代に變遷し文學の明光赫々として更に平民的文學を照らし雄文豪快なる史家兼批評家マコレー卿躍り出て全歐を壓倒し其謳歌宇宙に轟く最近小說家の兩雄ヂッケンス。サカレーあり若し一度本書を繙かば人は企業に說に財貨に雄に煙筒林杆相混する英國社會の內に幽清冷婉なる一個に天地の美觀樂園に驚くべし

內田不知庵主人著

文學一斑

全一冊洋裝
正價拾二錢
郵稅六　錢

文界漢々として常闇の國に似たり爲に本書は文學の義を明かにせむ爲めホ——エトリイの三種即ち叙事詩叙情詩及び戲曲を一々我國の詩歌俳諧謠曲淨瑠璃稗史野乘に照して解說したれば苟も小說を愛好し詩歌俳諧の壇上に游ふ者本書を一讀して必らず新たに發明する處あらむ